

伝書鳩

第4号

井上靖記念文化財団

ごあいさつ

井上ふみ

昨年暮の、靖の七回忌の「偲ぶ会」には大勢の方の参加をいただき、ありがとうございました。

この一月の命日には、湯ヶ島の菩提寺で家族相寄り七回忌法要をすませました。靖没後いつの間にか六年が過ぎたのでございます。

また、一月二十一日には、財団から日本中国文化交流協会の専務理事白土吾夫氏と、日本中国文化交流協会に、第四回の井上靖文化賞を、文化の交流を四十年にわたって努力された功績にたいして差し上げることができました。

さて、財団の広報誌『伝書鳩』は皆様のお力添えによりまして、四号になりました。

世田谷の庭の畑では、去年初秋に蒔いた種がよくできて、五十センチもの大根が七十本ほど取れ、ご近所にも配りました。今年もひよどりが椿やボケの蜜を吸いに来ています。

(井上靖記念文化財団 理事長)

目次

詩	
「テトラポッド」	
井上靖	一

文学館・記念館・記念室から

その詩業の凛烈	佐藤 章	三
中軽井沢・沓掛の文学展	大藤 敏行	六
心に残る言葉	原 祐子	九
井上文学展示室の担う役割	久城 隆敏	一三
井上先生の文学碑から	古田 辰雄	一五
「公共図書館全国交流会」について	明定 義人	一九

嶋中鵬二様のご逝去に思う	井上 ふみ	二二
--------------	-------	----

第四回・井上靖文化賞・白土吾夫氏と日中文化交流協会に贈る		二三
------------------------------	--	----

湯ヶ島町読書感想文コンクール授賞作品	鈴木 文子	二六
--------------------	-------	----

井上靖の七回忌を迎えて

大井森前町の頃

大越 幸夫 . . . 二九

麻の庭―井上靖のふるさとを訪ねて

笹本 正樹 . . . 三三

『天平の甍』の思い出

松本 昭 . . . 三六

特集・井上靖作品・映画演劇化・一覧表

. 三九

私の備忘録より

浦城いくよ . . . 六〇

奈良・唐招提寺に「天平の甍」の碑が建立

. 六七

作品に寄せる

初期詩集『春をよぶな』余聞

金子 秀夫 . . . 六九

『三原山晴天』を読んで

黒田 佳子 . . . 七二

茶の湯と私―『本覚坊遺文』に思う

五十嵐俊子 . . . 七五

平成八年度の事業報告

井上 修一 . . . 七八

鳩のお知らせ・文学館住所録

. 八一

テトラポッド

井 上 靖

テトラポッドのお陰で白砂青松の海浜が台なしにな
ったと人は言うが、私はそれほどあのコンクリート
の化物は嫌いではない。孤独を形象化すると、大体
あんなものになるんだ。月光も彼等の内部にだけは

徹らない。どいつもこいつも白く冴え返って、ふて
ぶてしく海辺に身を横たえている。あいつらが波を
防いでいると思ったたら大間違いだ。波の方が気味わ
るがって近寄って来ないだけの話だ。月の夜、水際
近いテトラポッドの塹壕の中で逢引きしてみたいと
思ってから既に久しいが、まだ果たさないでいる。

詩集 『乾河道』 所収

その詩業の凜烈

わが文学館の創設に力をそそいだ井上靖

佐藤 章

私の立場から申しますと、作家・詩人井上靖は、日本現代詩歌文学館名誉館長、同文学館振興会最高顧問として、この文学館の実現に尽力された時間とともにあり、つきせぬ思い出が胸底にきざまれております。

ちように私の企画、担当で文学館として井上名誉館長の七回忌を機に、その晩年の詩作をふくめ、詩業と

して巨きくのこるこの文学館への尽力を中心に一冊の本にまとめ、後世に継ぎたいと、昨年からとりかかり現在その編集に追われているところで、「伝書鳩」に書かせていただく光栄に緊張しているしだいです。

こういう機会でしたので、井上卓也著の「グッドバイ、マイ・ゴッドファザー——父井上靖のこと——」

を久しぶりに再読したのですが、あらためて感動をあらたにしているのは、「父、骨の髄から詩人であったこと」、「父の三大ライフワーク」——「その筆頭はなんといっても詩業である」という名言でした。同じく井上文学の本質は、詩以外のなものでもない、というほどそう信じてきた私でした。それが十数年前に井上名誉館長との思いもよらない機縁を得て、全国初の詩歌文学館を計画時から実現に至るまでご尽力をいただき、という私などには大業となったわけですが、まさにこれは井上名誉館長の詩歌文学館への高い見識と情熱が引力となり、その行動そのものが巨きな詩業なのだ、と思うようになったのでした。それについて『天城湯ヶ島町ふるさと叢書第五集』の「井上靖——天空を翔る」に「その詩業の完結」と題して書かせていただきましたが、いわゆる詩歌文学館の創生についての要約を書いたもので、いま編集中の本は、井上名誉館長の詩業をもっと深めたものにしたいと、念じております。

ともあれ文学館創生のはじめから、これまでたえず現場にいました私は、あらゆる面からみても、作家、詩人の井上靖氏の存在がなければ、この文学館は実現しなかったとつねに思っているしだいです。

このみちのくの一地方都市、北上市がこれだけの大事業を推進できたのは、ひとえに詩人井上靖の詩精神が元素となっているからで、懇意だった相賀徹夫前小学館社長との大きな二輪、公立としての立場でいえば、建設を決断した故斎藤五郎前市長、それを引き継いで実現した高橋現市長の井上文学の理解者としての二輪もあるのです。

昨年八月八日、井上家のご厚情によりご所蔵の詩歌関係の蔵書、約千五百冊のご寄贈を頂きました。建設計画時には「率先してやりましょう」といただいたものを合わせて二千点を超すほか、井上靖研究家の坂入公一氏の遺族から井上靖著作のほとんどになる約千五百点、毎日新聞社写真部長故二村次郎氏からの数々の

写真資料も着々と収集している文学館ですが、いずれ近い未来にはここは井上文学の研究センターとしての役目も担うことになるため、収蔵庫には「井上靖コレクション」と一括して整備、保存しているところで、今後の資料の充実こそが井上名誉館長の、この文学館への大いなる貢献に応える責務と思うこのごろです。

やはり北国の一月、「詩歌の森公園」の芝生も純白な絹のシャツにかかりました。一月十四日付、毎日新聞を読んでいたところ、家庭欄の「男の気持」という小さく、人気のあるコラムに「贈る言葉」と題され、昭和三十年一月、富士市での成人式で井上靖の講演のことが書かれています。引用すると、――

「昔ある人を訪ねた時、玄関にはってある次の言葉を讀んだのです。『今われわれは生きている。だけどころか死ぬだろう』 私はハツとしました。いいかげんな生き方はできない」

この講演の、遠い日の感動を忘れられずに投稿した

一文ですが、実は私も、この一文を読み、最近にない感動に襲われました。

筆者（富士宮市 宮原勝三さん）はこの「今われわれ——だけどいつか——」のことばをあす成人式を迎える青年に贈ろう、と結んでいました。この小さくても、するどいコラムを、私は何回も読み返しました。

凛烈——生と死にきびしく、やさしく、永く、孤独に対処してきた井上文学の基調は、この言葉にあるのではないでしょうか。

北上でお会いした際のこと、

「詩を書くことは、なによりもきびしいことですよ。だからこそ詩を大切にしなければならぬのです。」窓外からみえるゆき、ふぶきがいまさらに凛烈さを増す。

一月二十九日、死去の夜、私の胸底に、みえないゆきがふるのです。いつも——。

（日本現代詩歌文学館振興会 事務局長）

長野県北佐久郡「軽井沢高原文庫」から

中軽井沢・沓掛の文学展

大藤 敏行

平成八年七月二十日（土）から十月十三日（日）まで、軽井沢高原文庫で「中軽井沢・沓掛の文学展」と題する展覧会を開催した。

この展覧会は、千ヶ滝、星野、上ノ原、塩壺といった別荘地をふくむ、いわゆる中軽井沢地区を特集した文学展で、三十人ほどのゆかりの文学者とその作品を

紹介させていただいた。その中に、当然ながら、上ノ原に別荘をお持ちだった井上靖先生も含まれていた。

今回、開催にあたり、井上家から『憂愁平野』原稿や、交友のあった作家から井上先生宛の書簡・葉書、『蒼き狼』舞台公演パンフレット、軽井沢で撮影した写真など十数点をお借りした。

『憂愁平野』原稿は、井上先生が軽井沢を舞台に描いた数少ない小説作品、それも恋愛小説の自筆資料として、井上靖コーナーの目玉になった。濃紺の帙にきれいに仕立てられ、ずっしりと重量感があった。会場では、その冒頭部分を広げ、右脇に生沢朗氏装画の単行本『憂愁平野』（新潮社刊）を置いた。

交友作家からの書簡・葉書は、井上家とご相談のうえ、軽井沢で交友のあった作家にしほり、中野重治、壺井繁治、芝木好子、源氏鶏太、芹沢光治良、佐多稲子の各氏から井上先生宛のもの六点にした。そのどれもが親しみにあふれた内容であったのは、井上先生の人柄であろうか。

また、写真は、菊田一夫氏と松本幸四郎氏（当時染五郎）が井上別荘を訪ねた際のものや、ゴルフ中の井上先生の姿など、気軽な雰囲気のことを主として選ばせていただいた。

尚、吉川英治氏の一周忌の折、吉川別荘に文壇人二十名近くが集まった写真は、当時（昭和三十八年夏）、軽井沢にいた作家たちの豪華な顔ぶれを如実に示す好資料として、大変興味深かった。

以上のような、井上家からの資料のほかに、会場には、たとえば当文庫の資料から、井上先生の詩集『季節』の中から軽井沢を描いた次のような詩を開いて、来館者に読めるように配慮した。

碧 落

白樺の林と落葉松の木立の中を、細い道が何本か走っている。拋物線を描いているのもあれば、波型に伸びているものもある。直角に折れ曲っているのも、反転して、いずこともなく消えてしまっているものもある。そのどれかは大道で、そのどれかは子供道だ。老哲学者の散歩道もあれば、私の散歩道もある。その曲線と曲

線の交叉している幾つかの地点で、私は犬に会い、子供に会い、老哲学者に会う。秋風が吹きぬけて行く道があるが、それは何ものを通る道か知らない。私は日に一回、己が散歩道がその道と交叉している地点に立つ。その時だけ空が一枚一枚はがされて行く音が聞える。碧落が育っているのだ。

話が私事にわたり恐縮であるが、少年時代から井上作品、とりわけ西域ものやエッセイ、自伝ものなどを愛読してきた一読者として、この詩の底にも、一種の井上靖らしさのようなものが感じとれ、嬉しい気がするものである。

今後は、井上先生と軽井沢とのご縁を少しでも受け継ぎ、井上作品の理解をより一層深めていきたいと思う。

(軽井沢高原文庫 副館長)



東京駒場「日本近代文学館」から

心に残る言葉

原 祐子

井上靖先生は、私の勤務先、日本近代文学館の第二代名誉館長であった。

文学館の職員として、その人に接する機会が全くなかったわけではない。年末の〈理事と職員の忘年会〉では、みんなでブランデーのお湯割りを用意して、西域旅行のお話をうかがったこともある。しかし直接にお話をしたことはない。

作家・井上靖が私にとって身近になったのは、創立三〇周年の記念展「井上靖展」（毎日新聞社と共催）のスタッフになって、さまざまな研究書・評論を手引きに、私なりに井上文学の核心に近付きながら、一方で作品を読みはじめてからのことである。

井上文学は、その散文詩を核にしているという指摘が通説になっている。七回忌ということで、昨年末に

井上先生を偲ぶ会が開かれ、記念品として戴いた第一詩集の『北国』（復刻版）が手元にある。その巻頭には「人生」と題した詩が収められている。

「ところが更に晩近の科学は放射能の学説から、地球上の最古の岩石の年齢を十四億年乃至十六億年であると発表している。原子力時代の今日、地球の年齢の秘密はさらに驚異的数字をもつて暴露されるかもしれない。しかるに人間生活の歴史は僅か五千年、日本民族の歴史は三千年に足らず、人生は五十年といふ。父は生まれて四十年、そしておまへは十三年にみたぬと。——私は突如語るべき言葉を喪失して口を噤んだ。人生への愛情がかつてない純粹無比の清冽さで襲つてきたからだ。」

この引用はその詩の中心から最後までの部分であ

る。昭和二十三年、「獵銃」によって文壇にデビューする直前に活発に詩作していたうちの一篇で、この詩には井上靖の人への視線があくまでも客観的であること、その歴史認識には宇宙的な広がりを見いだす。なるほど人の、いや自分の一生なんてものは、宇宙的な視点でみれば、所詮塵芥のごときものだ。この客観的な事実を提示しながら、しかし井上靖の感性は最後のフリーズに私を導いて、猛烈に生きる勇気を与える。人生はかくも短く、ゆえにいとおしいと。日頃自分が考え、感じていることへの確かな手応えがそこにある。こうした共感を覚えるのは、私ひとりではないはずだ。やはり同じ頃に書かれた「半生」も同詩集に収められている。『ああ、銀が泣いてる！』という天才棋士・坂田八段の言葉に覚えた、痛烈な自虐の思いを記した。「私の愚かな所行の数々が、その時ほど鮮かに私の悔恨を拒否し、過失たることを否定し、私に冷たく背びらに向けて見えたことはなかった。」という詩中の一節によって、私もまた過去の事実の前に立ち尽く

し、これからも自分自身が打つてあろう“銀”の慟哭を痛切に思い知らされるのだ。しかしそれは、決して他人と共有するものではなく、あくまでもからりと乾いた、孤独な思いの中である。同名の小説の核となつた詩「狼銃」などにも共通するこの詩精神は、客観をつきぬけ、かくも透徹した自己認識の上によつて立つ。その感性こそが、井上文学の魅力なのかもしれない。

『シルクロード詩集』に収められている詩で、昭和四十九年に発表した「残照」は、シルクロードの旅のさなかに覚えた心境を記したものだが、「一日の終りに夕暮がやって来るように、——と、そんな思いが俺を捉えた。」と、人生のたそがれを感じている世代の、胸をつく書き出しで始まる。

「一日の終りに夕暮がやって来るように、俺の生涯にもいま夕暮が来ようとしている。無人の路地で驢馬が燃え、無人

の十字路で駱駝が燃えている。」

と続くこの詩のなかには、人生の終盤に入つてなお、驢馬も駱駝も自身をも燃え尽くすような夕暮を、黄昏ではない夕暮を正視している井上靖がいる。

また砂漠の中の若羌という集落で、押さえがたく沸き起こつた感情を、

「故里！そんな思いが、再び寢台に入つた私を捉える。前世か、そのまた前世か、私はここで生まれ、ここで育つたのだ。やがてまた聞えて来た風の音の中で、思ひは次第に確信に変わつてゆく。」

（昭和五十五年「若羌」）
イェルカシク

と書く。この確信に導かれて、生の輪廻についてではなく、その確固たる精神に安堵を覚えてしまうのはなぜなのか。ともあれ井上靖の抱いていた、人間の営

みへの熱い想いは絶えることなく、小説を書く原動力になっていたように思われる。

巡回を終了したのちに聞いたことだが、井上靖展の参観者は、中年の男性が際立っていたという。人生をすでに折り返し、自分の重ねてきた過去を顧み未来を展望しつつ、意識的な自己完結に向かって走り続ける四十代から五十代にとって、井上靖の詩や小説はさまざまな指針に満ちているだろう。同性として同じ時代を生きてきた女性たちは勿論だが、この同世代の見知らぬ男性たちにも、今、私は連帯感を感じている。

心に残る言葉は、状況によって異なるし、ひとつではない。井上靖の詩は、私にとって忘れられない言葉の宝庫となった。

(日本近代文学館事務局 職員

井上靖記念文化財団担当)

平成九年五月、詩誌「焰」主催で「井上靖・山本和夫生誕九十年記念」として「詩書画展」を開催。「井上靖・山本和夫・青春詩集」を記念出版しました。同会からは、井上靖自作朗読詩集「雪の夜に」(CD)も発売されています。

静岡県小笠郡大東町にある、「松本亀次郎先生顕彰の碑」(井上靖書)について詳しく知りたい方に、『松本亀次郎の生涯』(武田勝彦著、早稲田大学出版部)の本が出版されています。

鳥取県日南町「井上文学展示室」から

井上文学展示室の担う役割

久城 隆敏

昨年六月五日にオープンした、日南町総合文化センター。この中に、長野県軽井沢町の先生の別荘を模した「井上文学展示室」があります。井上靖文学碑、その隣にある文学館「野分の館」に続き、本町に、先生の事跡に接することのできる三番目の場所が誕生しました。

展示室には、第二十二回芥川賞受賞作「闘牛」の初

版本や、本町が題材となった「通夜の客」の直筆原稿を始め、財団のご厚意により、先生愛用の眼鏡、灰皿なども展示しています。また、書棚には約百二十冊の初版本とともに、先生の蔵書もお借りし、生前、先生がこよなく愛されたという軽井沢の別荘の空気を味わっていただいています。

オープンしてから約九カ月が経過しましたが、この

間、財団からは浦城様にお越しいただき、展示室内のレイアウトなどにつき具体的なアドバイスを頂戴しました。その際、先生が軽井沢でゴルフを楽しんでおられる写真なども飾っていただき、町内はもちろんのこと、遠くは、北九州や京阪神方面からの来館者に、先生の素顔に触れていただいています。

途方もなく遠く隔たった時空から伝えられた冷やかで無機質な対象を現在に蘇らせることが井上靖の歴史小説の手法であると評されています。そんな激しい衝動を感じつつ、ひたむきに歩き続けた井上靖。館外では、そんな氏の愛し続けたシルクロードのイメージを重ね合わせたモニュメントなど、「井上靖の世界」と名づけた三体のモニュメントに出会うこともできます。

また、同じ施設内にある図書館には「井上靖コーナー」を設け、先生の著作約二百冊を開架しています。一日平均約五十人の利用者がある図書館ですが、このコーナーの人気は高く、さらなる充実を図っていく予

定です。

開館して日も浅く、展示がまだまだといった感のある「井上文学展示室」です。残念ながら、たくさんの方の貴重な資料が、まだ資料室に眠っています。全国の井上靖記念館と比べると全てがこれからです。しかし、井上文学を堪能する環境は整いました。井上文学を愛する多くの人に、この環境の中で、新たな感動を見いだしていただくこと、これが、この恵まれた自然環境の中にある「井上文学展示室」の担う役割だと思っています。

この風景の中に、一日も早く井上文学が溶けこむ日がやってくるよう、この日南町にふさわしい活動を展開していきたいと考えています。

(鳥取県日野郡日南町

日南町総合文化センター担当)

旭川市 「井上靖記念館」から

井上先生の文学碑から

古田 辰雄

井上靖文学碑の一覧については、「伝書鳩」創刊号で紹介されたが、ここで旭川にある先生の文学碑に触れさせていただく。

旭川市は、人口は現在約三十六万人、人口でいえば道内では札幌に次ぐ二番目の都市で、街並みも年々整備されてきており、道北の拠点都市として発展してき

ている。

旭川駅から正面を見て、昭和四十七年に国道を恒久的な歩行者天国として、全国に先駆けて造成された買物公園通りがある。その右側、旭川市民の木であるナカマドが、整然と植えられている通りが、緑橋通りである。駅から徒歩で約十分、この通りの四条通八丁目、旭川信用金庫本店前の芝生植え込みのなかに、井

上先生の文学碑がある。

この文学碑は、旭川市開基百年を迎える記念式典が開催される前日（平成二年九月十九日）、爽やかな秋空が望まれる日に井上先生御夫妻と御家族出席のなかで除幕された。第二十一回中原悌二郎賞優秀賞受賞者である中井延也氏（上川郡愛別町出身）による黒御影石の彫刻に、井上先生の文字が刻まれている。

私は十七歳の、この町で生れ、
いま、百歳の、この町を歩く。

すべては、大きく変ったが、
ただ一つ、変らぬものありとすれば、
それは、雪をかぶったナナカマドの、
あの赤い実の洋燈。

一步、一步、その汚れなき光に、
足許を照らされて行く。

現実と夢幻が、

このように、びったりと、
調和した例を知らない。

ああ、北の王都・旭川の、

常に天を望む、凜乎たる詩精神。

それを縁とる

雪をかぶったナナカマドの、

あの赤い実の洋燈。

明治二十三年九月二十日、北海道庁令によって現在の上川地方に旭川村・永山村・神居村の三村が置かれることとなり、旭川としての名が初めて生まれる。それまで石狩川本流筋と牛別川・忠別川添いに暮らすアイヌの人々とごく僅かな和人が住む土地に、三つの村が置かれたことによって、四国・近畿・東北各県を中心にした屯田兵とその家族、八百戸が北方の警備と開拓のために移住してくる。このことによって、未開の

土地が拓かれ上川地方一帯に発展の基礎が築かれる。

その後屯田兵制度は終息することになるが、現在の旭川地域は上川盆地の諸河川が合流する北海道のほぼ中央に位置し広大な面積を有することから、明治三十一年に第七師団が札幌月寒から旭川に移転してくる。

「私は十七歳の、この町で生れ、いま、百歳の、この町を歩く。」の詩文は、無論、明治二十三年から井上先生が誕生した明治四十年までの年月、そして村ができて百年を迎えたことを表現したものである。

平成二年九月二十日、旭川大雪アリーナで約五千四百人の出席者のもと、開基百年の記念式典が開催されたが、この席で先生は特別講演をされている。講演のなかで、この詩について次のように述べられている。

「ここに『ああ、北の王都・旭川の、常に天を望む、凜平たる詩精神』、この『凜平たる詩精神』、『常に天を望む、凜平たる詩精神』この言葉で、旭川の人精神といえますか、この百年を貫いてきた旭川の街の、他

の街のもたない独特な精神を、この言葉で言い表わしたつもりであります。」

この言葉には、多少なりとも旭川に対するほめ言葉があるにしても、厳しい冬の自然と、春から初夏にかけて一度に草木の芽が萌え出ずる季節を併せ持つ北国の独特の風土を、肅然として見つめたものであるうし、生まれた地に対する誇りを見ることができると。

ナナカマドの木は、初夏に花が咲き晩秋に紅葉して、その実は燃えるように色づく。そして七たびかまどに入れても燃え残るという言葉の意味を持つように、まさに北国に生活する者の気質を表わしている。

雪をかぶったナナカマドの赤い実は、北国の厳しい冬の季節、一層の鮮やかさを増すが、井上先生にとって北国の象徴的なものとして心に深く残されたものと思える。

先生は、記念講演を終えたその日に旭川を後にするが、九月二十日の午後旭川を離れる前にもう一度、こ

の文学碑に立ち寄られている。これが生まれた土地・旭川の最後の訪問となった。

この文学碑の建立から三年後、平成五年七月に旭川市井上靖記念館が開館することとなったが、残念ながら井上先生はこの記念館を目にすることがなかった。

文学碑の建立前後について後年、当時の様子を御長男、井上修一氏（筑波大学教授）が北海道新聞に載せられているので、一部転載させていただく。

「晩年、父は旭川のことを頻繁に口にするようになって、己の人生の終着駅が見えるようになって、生まれた地の旭川のこと、北海道のことが気になり始めたのである。口にするだけでなく文章も書いた。それらを今読み直してみると、旭川での誕生をなつかしむと同時に、その対極にある己の死をも見詰めている。」

今年の旭川は例年になく雪の多い年である。先生はこの文学碑は、旭川の街を表現する象徴的な詩として市民に親しまれているが、ナナカマドの実を啄むキレ

ンジャクが舞い飛ぶなかで、碑の前で道行く人が足を止め、多くの人が井上先生と旭川の繋がりについて感慨を深くしている。

（旭川市井上靖記念館 館長）

滋賀県「高月町立図書館内 井上靖記念室」から

文学者記念室等を伴う

公共図書館全国交流会について

明 定 義 人

「文学者記念室等を伴う公共図書館全国交流会」という表題の長い名前の会は、一九九三年に石川県丸岡

町の中野重治文庫記念丸岡町民図書館の呼び掛けで第一回が開催され、その後、三重県四日市市「丹羽文雄」、愛知県吉良町「尾崎士郎」、滋賀県高月町「井上靖」

と続き、九七年は長野県喬木村「椋鳩十」が当番館となっています。

趣旨として「全国の公共図書館の中で、文学者記念室等を併設する図書館の長が集い、記念室の在り方と今後の課題等について話し合うと共に各館の交流を図

り、図書館の振興を図ることを目的」として掲げています。

当初、八館の参加で始まったのが十一館になり、今後もう少しづつだが増える傾向にあります。

図書館を建てるときにその館になにかの特徴をもたせたいと考え、図書館に由縁の文学者を顕彰する記念室やコーナーを設けることは、わりと思いつきやすいものです。

また、著名人の寄贈によりその人の名を冠した文庫をつくる、というのがあります。

どちらにしても、その多くは、日常の利用者とは縁のないところで考えられる、行政側のご都合の内のことです。ですから、そういう取り組みが実現しても、開館セレモニーに華を添えるだけで、あとはじやまなお飾り、無用の長物でしかないことになりかねません。図書館運営の基本は「本を借りていただく」ことにあります。それだけでは税金を投入する魅力を感じな

い人たちが「本を貸すだけじゃあね」と言い、「プラサルファが欲しい」「アピール力が足りない」などといって、あれこれ特徴を持たそうとします。図書館を図書館として評価せずに、図書館にくっつけた何かで評価しよう、他との違いを出そうという計略です。

そういうことについて、図書館界は否定的です。図書館本来の仕事の軽視とみるからです。

そういう中で、文学者等の記念室を持つ図書館が交流するのですから、この交流を有意義なものにしたいという思いが集まらないと、会そのものが長続きしません。

第一回から第三回までは図書館側の課題や悩みを出し合いました。遺族との関係、作家の魅力が歳月とともに失われて訪ねる人が少なくなること、著作そのものが絶版になり出版されなくなることなど、作家との関係の面での問題点、また、記念室と地域住民との関係が弱いという運営上の課題、といったあたりのこと

です。

図書館の記念室や各地にできている文学館には、時代の変化のなかで作家や作品の魅力を多くの人に伝えていく、という役割があります。マネージメントの力量が問われるのです。

そこで、高月町が担当した第四回の交流会は、近代文学館の清水節男理事をお招きすることになりました。

参加者と清水理事との出会いの場をつくる、そこから文学館の世界と図書館との交流の切っかけができれば、という思いからのことです。

第五回の喬木村では、自然に囲まれた中で、どんな交流会になるのか楽しみです。

図書館業務だけでもあわたたしい日常のなかで、記念室についてどれだけのことができるのかはたいへん疑問ですが、なにがしかの前進ができれば良しだと思います。

第四回交流会の出席の各図書館名

青森県立「近代文学館」

宮城県小牛田町立「千葉亀雄」

東京都文京区立隅外記念本郷「森隅外」

石川県内灘町立「井上靖」

福井県中野重治文庫記念丸岡町民「中野重治」

長野県喬木村立棕鳩十記念「棕鳩十」

愛知県吉良町立「尾崎士郎」

三重県四日市市立「丹羽文雄」

滋賀県彦根市立「舟橋聖一」

滋賀県高月町立「井上靖」

(大阪府茨木市立「富士正晴」は欠席)

(滋賀県伊香郡高月町立図書館 館長)

嶋中鵬二様のご逝去に思う

井上 ふみ

四月三日には、思いがけなく、当財団の理事をお願いしておりました嶋中鵬二様が肺ガンでお亡くなりになりました。

お身体のお悪いことを全く存じませんでしたので、びっくりいたしました。年齢とは言え、長らくお付き合いをさせていただいておりました方が世をお去りになってしまうことは、淋しく、悲しいことです。

今年になってからでも一月二十日の大寒入りの

日の杉森久英先生をはじめ、三月十五日には私の妹が八十五歳を目前に亡くなりました。

四月三日に嶋中鵬二様、四日には杉村春子様、七日「吉兆」の老御主人九十五歳の湯木貞一様、二十二日は作家の水木顯様、五月二日には靖が「氷壁」でお世話になった穂高の上條進様というぐあいでございました。

力を落としておりますが、いまはもうご冥福をお祈り申し上げるばかりでございます。

第四回 井上靖文化賞贈賞者決定

今日の日本と中国との交流の基礎をきずいた功績をたたえて

白土吾夫氏と 日本中国文化交流協会に

平成八年十一月二十一日 千代田区、山の上ホテル

選考委員 大岡信 辻邦生 樋口隆康 平山郁夫

で、一九九六年度（第四回）井上靖文化賞の最終選考

（五十音順、敬称略）

委員会が開かれ、長年日本と中国の文化交流につくし
業績を残してきた、白土吾夫氏と日本中国文化交流協
会とに対して、贈賞が決定した。

井上靖文化賞とは、文学者井上靖を記念し、日本文化
の向上に資するために、文学・美術・歴史等の

白土吾夫氏略歴

分野において、優れた業績をあげた人、または団体に贈る賞である。贈賞第四回目にあたる本年は初めて、個人及び、その団体にたいして贈ることとなった。

贈賞

年一回。賞状及び、澄川喜一氏（東京芸術大学学長）の制作になるブロンズ像の記念レリーフと賞金百万円を贈る。

いままでの贈賞者名

第一回贈賞者

小澤征爾氏（音楽指揮者）

第二回贈賞者

ドナルド・キーン氏（日本

文学研究家）

第三回贈賞者

陳舜臣氏（作家）

一九二七年 三月三日 東京に生まれる

一九四九年 九月 小学館入社

一九五六年 中島健蔵氏に招かれて日本中国文化交流

協会創立に参画

一九六〇年 同協会事務局長

一九八三年 同協会専務理事に就任

一九九五年 中国人民対外友好協会より「人民友好使

者」の称号を贈られる

現在までに訪中百三十一回に及ぶ 中

島健蔵、井上靖両協会会長を補佐し「ピ

ンボン外交」「舞劇団外交」から国交正

常化、さらに積極的な文化交流へと、日

本・中国の友好の舞台裏で大きく貢献を

してきた

日本中国文化交流協会の歩み

一九五六年 三月二十三日 協会創立（中華人民共和

国が成立して七年目に東京で創立総会が開かれた）

中島健蔵、千田是也、井上靖、宮川寅雄氏らが中心になり、会員制の任意団体として、困難な時代を切り拓いてきた

設立趣旨は「文学、芸術、学術、報道、スポーツなど、広い分野にわたる交流を推進し、両国人民の友好と文化交流を促進する」

日中国交正常化（一九七二年）後も、文化各分野の多くの人々の賛同を得て、日中両国の交流を深め、相互理解を促進し続けている

一九七三年 朝日新聞社から「朝日賞」を受賞

一九八五年 国際交流基金から「国際交流奨励賞」を受賞

受賞

一九八七年 中日新聞社から「中日文化賞」を受賞

一九九六年 協会創立四十周年をむかえた。現在協会

会長は團伊玖磨 代表理事は團伊玖磨

（兼務） 高山辰雄 水上勉の三氏

第五回 天城湯ヶ島町主催

井上靖作品読書感想文コンクール

高校生の部 「最優秀賞」受賞作品

『北の海』を読んで

静岡県立清水南高等学校一年

鈴木 文子

私が洪作と初めて出会ってから約二年が経過している。それは私が受験勉強をしていた中学二年の冬のことだった。ある国語の問題文に「夏草冬濤」の一部分が使われていたからである。一部分だけだったから、

「洪作」という人物についてこまかいところまで解るわけがない。しかし、私はその短い文章に触れただけで、洪作について深入りしたくなってきたのだ。この不思議な匂いのする少年に。

洪作は不思議な匂いをするのではなく、本当に不思議な少年だった。私はよく、友人や先生から「変わっている」と言われるが、私は洪作の足元にも及ばないと思った。全てにおいて洪作は個性的なのである。生い立ち、友人、性格。特に性格においては単純でありいい加減に感じる所が多かった。台北の母親から来た手紙を開封しないで二、三本溜めていたり、台北に行くと言いつつ別会をやつてもらつたのに、半月ほど経過してもまだ沼津にいる洪作。私は物事に対してきちんと計画を立て、そしてきちんと実行しなければ気がすまない性格なので、洪作の神経を疑つてしまった。もちろんその原因は、藤尾たちが言うように幼いころから親元を離れて育ってきたせいで私も思う。自由すぎたのだ。また、洪作の性格が周りに流されやすいという性質を持っているのも、原因の一つではないかと思う。洪作の心の中では「自分」という柱が立っていないのだ。だから台北に行くか行かないかという重大な問題を、宇田先生の奥さんによって決められてしま

つたのだ。ああ、「しろばんば」の時の可愛い洪ちゃはどこに行つてしまつたのだろうか。

台北に行くことが決定した洪作は、一度郷里に帰ることにする。洪作が郷里に帰るということは、私にとつてうれしいことだった。おそらくそれは、私が「しろばんば」を以前に読んだことがあるからだろう。湯ヶ島でののびのびとしたおぬい婆さんの生活は、私の心が澄んでいくようだった。しかし、洪作自身は面倒なことのように思つていたようで、私は残念だった。しかしその気持ちは、洪作が土蔵に行つたことにより吹っ飛んでしまう。

——それにしても、婆ちやが死んでから、もう六年になるな。もっと生きていてくれたら、よかったのにな。ちつとも面白いことはないよ。

——おお、おお。

おぬい婆さんの声は泣き声に変わっている。

——坊はなんと可愛い、なんと優しいことを言つてくれるすら。この婆ちやももっと生きたかった。生きて、

いつまでも坊の傍に居たかった。死んでも死にきれなかった。坊が大臣になるまで生きていたかった。

死んでしまったはずのおぬい婆さんと洪作の会話である。私はこの部分を何度読んでも、胸が締め付けられ、泣きそうになる。

郷里から帰ってきた洪作は、台北に行く前に金沢の四高に行く。「練習量が全てを決定する柔道」という四高柔道部員の蓮実の言葉に魅せられたからだった。

はたして洪作がその稽古についていけるだろうか。私は思った。高校受験に失敗した洪作は、中学の柔道部を見てはいたが、遊んでばかりいたからだ。そんな奴が「練習量が全てを決定する柔道」の中でやっていけるはずがないと考えたからである。しかし、予想とは裏腹に、大天井、杉戸、蔦という仲間ができ、来年はここを受験しようと思意する。進路についても深く考えていなかった彼がようやく自分で決めたのだ。洪作は四高の柔道が気に入り、この三人を気に入った。私は洪作はいい仲間を持ったと思う。大天井は荒々し

く、蔦はすぐ吠え、杉戸はのっそりしているが、木部、金枝、藤尾たちとは違った洪作との共通点がある。人に好かれ、人に流されやすい洪作は、彼らによつて金枝たちとは別の方向に流され、そのことでまた大きく成長していくことだろう。来年四高に入ることを自分で決めた洪作にとっては、入学試験などというものは小さなハードルである。そのハードルを越えようと、金沢での青春の日々が洪作を待っている。

この物語は台湾に行く船の中で終わる。これで洪作と別れてしまうのはとても悲しい。この不思議な少年は、台北の家族とうまく生活しているだろうか。きっと、洪作の性格の単純さ、いい加減さに母の七重は驚いているだろう。監督者ができた洪作は、さぞや毎日が窮屈に感じていることだろう。しかし半年が経てば三人に会える。柔道ができる。北の海の荒々しさが、洪作を一人前の少年に変える。

不思議な少年は、不思議な青年になるのだ。

(「文学のふるさと湯ヶ島」よりの転載)

七回忌を迎えて

大井森前町の頃

大越 幸夫

私が井上靖さんに最初にお目にかかったのは、昭和二十三年の暮、井上さんが大阪の毎日新聞学芸部から東京の出版局書籍部に移られて間もないころのことである。

当時私は早稲田大学の学生で、毎日新聞出版局で学生アルバイトとして働いていた。アルバイトとはいえず書籍部の一角に机を与えられ、社員と同じように単行

本の編集に当たっていた。井上さんの机は私の机の斜め前にあった。大学の方は必要な時だけ教室に顔を出すような学生生活で、どちらが本業かわからない毎日を送っていた。井上さんは昭和二十五年二月に芥川賞を受賞され、いよいよ本格的に作家生活に入られることになるが、その時井上さんから「私の小説の清書の仕事を手伝って下さい」と依頼され、それから井上家に

出入りするようになった。それが井上靖さんとの長い関係の始まりであった。

そのころ井上さんのお宅は大井森前町にあり、ご家族は前年の十二月に伊豆湯ヶ島から引越されたばかりの時である。芥川賞受賞の日、ふみ夫人が近所の写真屋さん呼んできて庭先で撮したご一家の写真があるが、当時、長女の幾世さんと長男の修一君は小学生、次男の卓也君と次女の佳子さんは学校前の幼児で、夫人にとっては一番手のかかる時期であつたし、家計も最も苦しいときであつたと思われる。

清書の仕事の時は私は早目に新聞社を出て真直ぐに大井のお宅へ伺つた。お宅では玄関を入つて右側の六畳の部屋が私の仕事部屋で、夫人は私のために着替えの丹前や寝具を用意して下さつていた。夫人はお子さんと早目の夕食を済ませたあと、井上さんと私の食事の用意をされていた。卓袱台をはさんで私は井上さんと向かい合つて坐り、日本酒の熱燗を何本かお替

りしながら夕食をとつた。井上さんはその日の昼間に書かれた原稿を書斎から持つてこられ声を出して読みながら、その作品のねらいを熟っぽく語られるのだつた。

食事が終ると、井上さんは書斎に入つて仕事を続けられ、私は部屋に戻つて清書にとりかかった。清書の仕事はスピードをあげても、四百字詰め原稿用紙で一時間に四、五枚が精いっぱいである。井上さんの原稿はあちこち手を入れられたものが私のところへ来るのだが、読みにくいところは殆どなく、清書しやすいものであつた。しかし清書である以上、誤字や訂正は許されるものではなく、誰もが読める判りやすいものでなければならなかつた。

仕事は私が翌日新聞社に出なければならぬ時は三時過ぎには切りあげ、ひと寝入りしてから朝食を済ませてお宅を出たが、週末など新聞社に出なくてもよい時は徹夜になることもしばしばで、外からみれば私は井上家の下宿人のようであつた。新聞社の仕事などで

私が清書のお手伝いが出来ない時は、夫人や他の方がたがなさっていた。

私が井上さんの作品で最初に清書をしたのは、「猟銃」、「闘牛」、「通夜の客」に次ぐ第四作の「比良のシャクナゲ」である。当時は国語改革が急速に進められ、千八百五十字の当用漢字、新字体、新かなづかいがうるさくいわれた時期でもあった。井上さんは、「文学界」や「新潮」に発表されるいわゆる純文学は旧かなづかいで、「オール読物」や「小説新潮」にのせる読物や新聞小説は新かなづかいでというように書きわけられていた。幸い私は新聞社で校正の仕事をしていたこともあり、その使いわけは少しも苦にならなかった。

話は少し脇道にそれるが、井上さんが最初に「文学界」に発表された、「闘牛」や「猟銃」は旧かなづかいで書かれているが、いま新潮社から発行されている「井上靖全集」では詩を含めた全作品が、新かなづか

いで編集されている。また井上靖の「靖」という字は、右側半分の「青」の字の下の部分が旧字体では「円」であるが、新字体では「月」となっていて、最初の創作集「闘牛」（文芸春秋新社刊）では「円」の字を使っている。

当用漢字の新字体が広く定着するようになってからは、新字体の「月」を殆どのが使うようになっていく。このことに関して直接伺ったことはないが、井上さんご自身はご自分の名前だがどちらでなければならぬというこだわりはもっておられなかったように思われる。

私の清書のお手伝いは、私が東京放送に就職することになった昭和二十六年十二月で終ることになった。始めてから僅か二年に満たない月日であったが、私の人間形成について一番大切なものを与えて戴いた月日でもあった。

井上さんにとってはこの二年間は芥川賞受賞後、作

家としての地位を確立するために、しやにむに書きまくった時期でもあった。井上さんは「多作すぎるという批判もあるが、この時期、書きまくらなければ消されてしまうのだ」とよく言われていた。ふみ夫人もその著書「やがて芽をふく」の中で、「このころは猛烈といつていいほど忙しい時代だった」と書き記されている。井上さんは作家活動が本格化するのに伴って新聞社に出版社するのは段々と少なくなっていた。しかし仕事が一段落すると会社で顔を合わせ、同僚や部下に声をかけて「一杯やりましょう」と、よく銀座にくり出したものだった。銀座に出た時は、二、三軒はしごして、御帰還は「御前様」となるのが常だった。

井上さん一家はこのあと、お住いを大井森前町から大井滝王寺へ移されるが、この森前町と滝王寺町の七年余りの「大井時代」が井上さんにとっても夫人にとっても、最も大変な時代ではなかったかと思われる。

朝日新聞に連載された「氷壁」が大ヒットし、「天

平の麓」を完結されて、井上さんは作家としての地位を磐石なものとし、多作の時代を終ることになる。そして昭和三十二年春、現在の世田谷の新居に移られて、「これからは多作をやめ、本当に書きたいものだけを書いていく」時代に入っていくことになる。

（元東京放送常務）

七回忌を迎えて

麻の花

井上靖の故郷を訪ねて

笹本 正樹

夏休みの暑い日でした。南伊豆下田の母の実家に帰っていた私は、ふと作家井上靖のふるさとを訪れてみたいと思いました。

これは昭和四十年ごろの話ですから、バスで天城山を越えていったのです。湯ヶ島の駅で降りて、めざす井上邸にたどりつきました。びっくりしたのは、庭に大きなアスナロの樹があったことです。

「ああ、あのへあすなる物語」というのはこの樹から思いついた題なのかなどと、ひとりごとを言いながら、その樹に触れて感心していました。

その時家の小窓があいて、なかから婦人がこちらを見ていました。私はあわてて、そちらにむかつて、おじぎをしました。しばらくしてから玄関が開きました。にこにこして出てこられた八十がらみの老婦人は、

全く靖先生とそっくりの顔立ちの方でした。いうまでもなくご母堂の八重さんであることが、すぐわかりました。

当時、私はまだ独身で、助教授になったばかりの肩書きの名刺をだしました。そして、とつさにこう言ったのです。

「私は、大学で教育学を教えているものです。お母さんが靖先生をどのように、お育てになったのか、教えていただきたいのですが」

八重さんはきさくに、少しも警戒心なく、

「どうぞ、どうぞお入りください」

と言われた。私は玄関に靴をぬぐと、さそわれるままに廊下を奥にたどって、左にまわった。奥廊下におかれたテーブルの両脇に籐椅子がおかれてあった。

泉水の庭に大輪の花が咲いていた。

「あれは何の花ですか」

「あれは麻の花でございますよ」

「きれいですねえ」

そう言って、私は籐椅子に腰かけた。

「どのように靖先生を育てられたのでしょうか」

「私は離れておりましたからね。育てたというほどではないですよ」

その時、中年の女性が飲み物を運んできた。静子さんといって、長女の方のようである。カルピスがおかれた。ところで「養之如春」の額はどの部屋にあるのだろう、などと考えているうちに、どんどん話されていく。

「中学生のころから、詩をお友達とやっていたようです。高等学校に入りますと、柔道ばかりやっておりましたから」

なるほど、学校の勉強をやるというよりは、クラブ活動のほうに力を入れておられたのか、そのほうが人生での活躍には重要なことかも知れない。ともかく、書くことと、身体を鍛えるという学生生活をすごされたのだなあ、などと考えさせられた。

「でも、浜松中学を受けた時は一番で入ったんで、

ございますよ。作家として認められましたのも、ただ運がよかったからでございましょうね」

ご母堂は楽天的で大らかな性格の方であった。そのあと八重さんと静子さんに案内されて、家の右側にある蔵をみせていただいた。もう中には入れないという。

そこで一枚、写真をとらせていただいた。静子さんもご母堂をいたわって、よい方であった。家に帰ってから、机の上に、「文豪の母」として写真を飾った。

ご母堂に一枚送って、一枚が残った。三枚焼きつけたのである。ふと、私はそれを東京の井上靖先生に送ることにした。お会いしたことはなかったので、一愛読者よりとした。もちろん、ご返事はなかった。

それから二、三年たった頃であつたらうか、「月の光」というご母堂のことを書かれた本が出版された。

ああ、あの折はとてもお元気だったのに、もうこのような状態になられたのかと、もの哀しい気持ちであつた。しかし、それは母上を思う井上靖先生のなんとも心に迫る名文であつた。

それから、私のところでは次女が生まれた。ふと、あの夏の日に、井上八重さんを訪れたとき、麻の花が咲いていたのを想い出して、麻里と名前をつけた。その次女も今年の夏は二十五歳になろうとしているので、この回想は約三十年前の話となる。

私は重要な書きものや論文を書くときに、井上八重さんのお写真を机の上に飾って「文豪の母」どうぞ力を与えてくださいますようにと、祈ってから筆を執るようにしている。

（平成九年新春、私は九十歳になった母を伊豆下田に訪れた。その折、郷土史家の方から「しろばんば」のおぬい婆さんの生家は下田郵便局のところにあつたと聞いた。ああ、もう一人、ここにも靖先生の間人形成にかかわった重要な女性がいたのだな、と気がついたのである。）

（香川大学 名誉教授）

七回忌を迎えて

「天平の薨」の思い出

松本 昭

「昭和三十二年一月十一日（金）」

井上靖氏と井上氏が中央公論に書く小説のため、銀座でフグ料理の馳走になる」

古びた私のメモ帳に、こう記されている。当時、私は毎日新聞学芸部の文壇担当記者をしていたが、まだほんの駆け出しであった。

その私が、前年秋から、朝日新聞に連載された評判

の小説『水壁』の作家に呼び出されたのだから、大いに緊張して、折角のフグをどこへ食べたか分からなかった思い出がある。

井上先生に対し、私を推薦したのは野村尚吾さんであった。野村さんは芥川賞候補にしばしば挙げられていた作家だが、当時、サンデー毎日編集次長で、先生と極めて親しい間柄だった。そして私にとってはサン

デー毎日記者時代の上司であつた。

井上先生は、ゆつくりとした口調で、杯を片手に、でも熱っぽく、日本の歴史文学について、こう語られた。「日本の歴史文学には、森鷗外の築いた世界がある。歴史の把握と人間の探求をめざした鷗外は、実証的で史実を重んじ、極めて理論的だった。それに対し中島敦は新しいロマンの分野を創つたと思う。私はむしろこの鷗外の歴史文学の上に、新しい世界を拓いてみたいと思っている」と。

到底、私ごときに、よい知恵がある訳がない話である。仕方なく、私は、こう申し上げた。「私の早大の恩師に安藤更生という人がいます。唐招提寺の鑑真和尚の研究に熱中して、中國へ渡り、九年間かかってメートルほどの高さの論文を書き上げたのですが、敗戦で帰国する際、この原稿をもって帰れなかつた。今早稲田の先生をしながら改めて書き上げ、それを奥さんがタイプに打ち上げたところです。これを材料に、鑑真の伝記を小説にされたらどうでしょうか」と。

「坊さんの伝記ですか……」と、先生はあまり気の進まぬようであつた。そこで私は、つけ加えていった。

「鑑真和尚は、千二百年たつても生きています。その鑑真のバトス（情熱）をお書きになったら、先生の文学も千二百年生きるでしょう」。

瞬間、先生はフームとおっしゃつた。その後、先生は考え込むと、いつもこのフームとおっしゃるのを知つたが、この時は私の小生意気ないかたに、気分を害されたのかと思つた。

だが、次の先生からの質問は、安藤先生の鑑真研究についてであつた。私は、ぜひ安藤先生とお会いになるようにと、力をこめておすすめした。

その五日後の一月十七日午後二時、井上先生がお待ちになつている三田の料亭「桂」に、私は安藤先生を案内。お二人は、初対面とは思えぬ親しさで二時間あまり話し込んでいらした。その折、安藤先生は、こういった。「私は一学者として鑑真研究に打ち込んでいますが、あなたは小説家として鑑真和尚の渡日の話を

書いてみませんか。私の史料はなんでも提供します」

以後、何回、井上先生を早大の安藤研究室へご案内したのか。やがて三月、『天平の甕』が中央公論に連載され始めた。

この作品は、確かに安藤先生の研究の成果である鑑真和上の渡日の事情や戒律の問題について、正確な史実を踏まえている点、鵬外の築いた歴史文学の系統といってもよいだろう。しかし、井上先生は、その史実の舞台の上に、五人の天平留学生を活躍させ、個人の情熱や意志をこえた運命の嵐に、それぞれがもてあそばれる姿を描いている。歴史の大海の中に浮沈する微小な人間の姿に、思わず嘆息をつかざるをえない。だが井上先生は敢えて鑑真和上その人に直接ふれようとはしない。だからこそ、大海の激浪の上に、大きく一人、和上の姿が浮かび上がってくるのではないか。それは微小な人間と対照的な、仏陀の姿、とさえいってよいのかもしれない。恐らく、井上先生は、唐招提寺御影堂に祀られている和上のお姿を思い浮かべつつ、

その千古変ることのない静けさと安らぎの和上の心の底に、消えることのない情熱の灯を見出したのではないかと思うのである。

昨年五月二十五日、唐招提寺境内にある鑑真和上の御廟の左側に、文学碑『天平の甕』が建立された。重量感のある生駒石の面に、先生の直筆『天平の甕』が刻まれているが、文学碑建立は第八十二世唐招提寺長老に就任された遠藤證圓大僧正の長年の夢であった。長老のお伴をして雪の降る日、ここえながら石碑にする生駒石を見にいったのも、懐しい思い出である。

また、私の勤める昭和女子大学の光葉博物館で、『天平の甕——鑑真和上と唐招提寺』を開催。ふみ夫人を始め、遠藤長老も奈良からかけつけて賑々しく話題を呼んだのも、あれもこれも、その昔の『天平の甕』誕生につながるご縁の賜物に違いないと思っている。

(昭和女子大学 副学長)

井上靖の作品

映画・演劇化一覧表

三原山晴天

●劇「三原山晴天」 三景

一九三三（昭和八）年十一月十日

劇場Ⅱ角座（大阪）

劇団Ⅱ大阪の劇団「享楽列車」

脚色Ⅱ山本正男

出演Ⅱ中田正造 山口俊雄 五月信子 金平運之助

佐賀智恵子 金剛麗子

明治の月

●劇「明治の月」 一幕二場

一九三五（昭和十）年十月一日～一カ月間

「全新作狂言揃 男女優大合同番組」

劇場Ⅱ新橋演舞場

監督Ⅱ松居桃多郎

装置Ⅱ薄拙太郎

配役Ⅱ林源一郎・市川小太夫 唐木信之助・守田

勘弥 お幸・森律子 時之助・河合栄二郎

その他・澤村田之助 等

○劇「明治の月」

一九三五（又は翌年）十二月二十六日・二十七日

劇場Ⅱ大阪今里新地演舞場

劇団Ⅱ「あかつき座」の第一回公演

昭和十年十月と同じ脚本で別の劇団が公演

流 転

●映画「流転」（第一部 第二部）

松竹映画

一九三七（昭和十二）年七月〜九月

監督Ⅱ二川文太郎

配役Ⅱお萩・森静子 新二郎・坂東好太郎 海老蔵

・河原崎權十郎 その他・柳さく子 中村正

太郎 志賀靖郎

主題歌Ⅱ「流転」「流転三味線」当時レコード化

作詞・西条八十 作曲・上原げんと

●映画Ⅱ「流転」

松竹映画

一六五六（昭和三十二）年

脚色Ⅱ井手雅人

監督Ⅱ大曾根辰保

出演Ⅱ高田浩吉 香川京子 雪代敬子 近衛十四郎

渡辺篤 北上弥太郎 市川段四郎 市川春代

獵 銃

●映画「獵銃」

松竹映画

一九六一（昭和三十六）年一月

脚色Ⅱ八住利雄

音楽Ⅱ芥川也寸志

監督Ⅱ五所平之助

配役Ⅱ彩子・山本富士子 みどり・岡田茉莉子 薔

子・鰐淵晴子 礼一郎・佐田啓二 穂介・佐

分利信

●舞踊「獵銃」

一九五三（昭和二十八）年十二月七日

「第一回 橘彌生発表会」

劇場Ⅱ新橋演舞場

脚色・演出Ⅱ尾根幸夫

作曲Ⅱ杵屋正邦

作舞Ⅱ煤茂都陸

●ラジオ「狼銃」

「ラジオ図書館」・毎日放送

一九九一（平成三）年三月二十四日

闘牛

●ラジオ「闘牛」

「ラジオ名作劇場」・NHK

一九七二（昭和四十三）年六月二日

通夜の客

●劇「通夜の客」

一九五四（昭和二十九）年十月三十日

劇場ⅡNJBホール

出演Ⅱ山岡比佐乃 高橋昌也 高橋真子

●映画名「わが愛」

松竹映画

一九六〇（昭和三十五）年

監督Ⅱ五所平之助

出演Ⅱ有馬稲子 佐分利信

●舞台・語り「通夜の客」

一九九四（平成六）年十二月二十四日

「浜田寸躬子・ことばのしらべ」

舞台Ⅱ鎮仙会能楽研修所

語りⅡ浜田寸躬子 大鼓・望月佐武郎

比良のシャクナゲ

●ラジオ「比良のシャクナゲ」「ラジオ劇場」NHK

年月未詳

劇団ⅡBK放送劇団

脚色Ⅱ西沢実

朗読Ⅱ楠義孝 渡辺富美子

その人の名は言えない

●映画「その人の名は言えない」

東宝映画

一九五一（昭和二十六）年

脚本Ⅱ八木隆一郎 井手俊郎

監督Ⅱ杉江敏男

出演Ⅱ山村聡 二本柳寛 小林桂樹 田崎潤 河

津清三郎 角梨枝子

黯
い
潮

●映画「黯い潮」

日活映画

一九五四（昭和二十九）年九月

監督Ⅱ山村聡

製作Ⅱ高木雅行

脚本Ⅱ菊島隆三

出演Ⅱ山村聡

滝沢修

津島恵子

左幸子

東野

英治郎 千田是也

死
と
恋
と
波
と

●映画名「愛」

配給・新東宝

一九五四（昭和二十九）年九月

富士プロダクションのオムニバス映画

第一話「結婚記念日」

第二話「石庭」

第

三話「死と恋と波と」

総タイトル「愛」

監督Ⅱ若杉光夫

出演Ⅱ安西郷子 森雅之

●ラジオ「死と恋と波と」 「ラジオ図書館」 毎日放送

一九七〇（昭和四十五）年十月三日

石
庭

●映画名「愛」

配給・新東宝

一九五四（昭和二十九）年九月

製作Ⅱ富士プロダクション オムニバス二話「石庭」

監督Ⅱ若杉光夫

出演Ⅱ山内明

桂木洋子

宇野重吉

白
い
牙

●映画「白い牙」

松竹映画

一九六〇（昭和三十五）年六月

脚本Ⅱ長谷部慶次 堀江英夫

監督Ⅱ五所平之助

配役Ⅱ沙夷子・牧紀子 東作・佐分利信 峰夫・三

上真一郎 阿佐子・桂木洋子 角田康之・南

原宏治 京子・轟夕起子 その他・浦辺粂子

黄色い靴

●映画「黄色い靴」

松竹映画

一九五二（昭和二十七年）

監督Ⅱ弓削進

出演Ⅱ幾野道子 徳大寺伸

結婚記念日

●映画名「愛」

配給・新東宝

一九五四（昭和二十九）年

製作Ⅱ若杉監督オムニバス一話「結婚記念日」

脚本Ⅱ植草圭之助 古川良範 若杉光夫

監督Ⅱ若杉光夫

出演Ⅱ木村功 有馬稲子

澄賢房覚え書

●映画名「KOYA」

一九九三（平成五）年十二月

製作Ⅱ株式会社ヒーロー・FOUR TACKS・

鐵プロダクション

脚本Ⅱ高山由紀子

監督Ⅱ村野鐵太郎

出演Ⅱ名取裕子 隆大介 滝田裕介 井川比佐志

峰岸徹

戦国無頼

●映画「戦国無頼」

東宝映画

一九五二（昭和二十七年）年三月

脚本Ⅱ黒沢明 稲垣浩

監督Ⅱ稲垣浩

音楽Ⅱ團伊玖磨

出演Ⅱ三船敏郎 山口淑子 三国連太郎

青衣の人

●映画名「離愁」

松竹映画

一九六〇（昭和三十五年）年九月

脚本Ⅱ柳井隆雄 大庭秀雄

監督Ⅱ大庭秀雄

製作Ⅱ小松秀雄

配役Ⅱ 暁子・岡田茉莉子 れい子・桑野みゆき

真介・佐田啓二 光太郎・山本豊三

緑の仲間

●映画「緑の仲間」

大映映画

一九五四（昭和二十九）年八月

脚本Ⅱ 猪俣勝人

監督Ⅱ 森一生

出演Ⅱ 森雅之 山根寿子 若尾文子 根上淳

風と雲と砦

●映画「風と雲と砦」

大映映画

一九六一（昭和三十六）年二月

監督Ⅱ 森一生

出演Ⅱ 勝新太郎 水谷良重

●劇「風と雲と砦」

一九六一（昭和三十六）年十一月八日～二十二日

劇場Ⅱ 新橋演舞場

劇団Ⅱ 前進座「前進座十一月公演」

脚色Ⅱ 津上忠

装置Ⅱ 伊藤薫明

演出Ⅱ 宮川雅青 小沼一郎 音楽Ⅱ 團伊玖磨

出演Ⅱ 河原崎長十郎 中村翫右衛門 河原崎国太郎

瀬川菊之丞 河原崎しづ江 嵐芳三郎

●劇「風と雲と砦」

東宝

一九七〇（昭和四十五）年四月三日～三十日

「帝劇グランド・ロマン公演」 三幕

劇場Ⅱ 帝国劇場

脚本・演出Ⅱ 菊田一夫 演出Ⅱ 津村健二

配役Ⅱ 左近八郎・石坂浩二 山名鬼頭太・中村吉右

衛門 俵三蔵・高橋悦史 安良里・上月晃

みゆき・酒井和歌子 ひめ・倍賞美津子 塚

田小十郎・山田芳夫

花と波濤

●映画「花と波濤」

新東宝映画

一九五四（昭和二十九）年

監督 松林宗恵

配役 朱実・久慈あさみ 正昭・岡田英次 その他

・筑紫あけみ 山内明 上原謙 高杉早苗

十朱久雄 長岡輝子

あすなる物語

●映画「あすなる物語」

東宝映画

一九五五（昭和三十）年

脚本 黒沢明

製作 田中友幸

監督 堀川弘通

音楽 早坂文雄

配役 玲子・久我美子 鮎太・久保明と久保賢一

子 岡田茉莉子 雪枝・根岸明美

●TVアニメ「あすなる物語」（青春アニメ全集）

日本テレビ

年月未詳

製作 日本アニメーション

脚本 吉田憲二 キャラクターデザイン 小林治

主題歌 「青春の船」

音楽 山本純ノ介

作詞・なかにし礼

ある日曜日

●TV「ある日曜日」「東芝日曜劇場」中部日本放送

一九六八（昭和四十三）年十一月三日

脚本 林秀彦

プロデューサー 小川陽太郎

演出 山東迪彦

配役 木原・小林桂樹 道子・草笛光子 寿美子・

日塔智子

昨日と明日の間

●映画「昨日と明日の間」

松竹映画

一九五四（昭和二十九）年九月

脚本 椎名利夫

監督 川島雄三

出演 鶴田浩二 月丘夢路 菅佐原英一 進藤英太

郎 野添ひとみ 淡島千景

風林火山

●ラジオ「風林火山」

「日曜名作座」・NHK

一九五八（昭和三十三年八月二十四日）数回

脚色Ⅱ椎名龍治

朗読Ⅱ森繁久弥 加藤道子

●TV「風林火山」

NET開局十周年記念番組

一九六九（昭和四十四年）一月三十日～三月六日

「ナショナルゴールデン劇場シリーズ」一～六回

脚本Ⅱ稲垣俊

製作ⅡNET 俳優座

演出Ⅱ大村哲夫

音楽Ⅱ山本直純

配役Ⅱ山本勘助・東野英治郎 武田晴信・緒形拳

由布姫・栗原小巻 諏訪頼茂・高橋幸治

三条氏・小林千登勢 弥弥御料人・市原悦子

●映画「風林火山」三船プロダクション 配給・東宝

一九六九（昭和四十四年）年

脚本Ⅱ橋本忍・国弘威雄 製作Ⅱ田中友幸 稲垣浩

監督Ⅱ稲垣浩

配役Ⅱ山本勘助・三船敏郎 由布姫・佐久間良子

於琴姫・大空真弓 武田晴信・中村錦之助

その他・中村勘九郎 石原裕次郎 中村翫右

衛門 中村賀津雄 田村正和 志村喬 緒形拳

●劇「風林火山」

四幕

一九六九（昭和四十四年）年六月

劇団Ⅱ前進座

脚色・演出Ⅱ池波正太郎

●劇「風林火山」

四幕十二場

一九九三（平成五年）年九月

劇場Ⅱ明治座「明治座新開場記念九月公演」

脚色Ⅱ斎藤雅文

監督Ⅱ安部晴治 中島幸則 赤塚幸信

演出Ⅱ堀井康明 音楽Ⅱ渡辺俊幸

●劇「風林火山」

東宝

一九七一（昭和四十六年）年六月四日～三十日

「帝劇グランド・ロマン」六月特別公演」

劇場Ⅱ帝国劇場

脚色・演出Ⅱ小幡欣治 音楽Ⅱ増田勲

出演Ⅱ中村吉右衛門 市川染五郎 加東大介 大空

真弓 淀かほる 長谷川稀世

●TV「風林火山」 日本テレビ開局四十年特別番組

一九九二(平成四)年十二月

年末時代劇スペシャル第八弾「武田の軍師 山本

勘助の愛と野望」

脚本Ⅱ杉山義法 製作ⅡNTVユニオン映画

監督Ⅱ池広一夫 音楽Ⅱ羽田健太郎

配役Ⅱ山本勘助・里見浩太朗 由布姫・古手川祐子

三条夫人・池上季実子 武田晴信・館ひろ

し 於琴姫・田村英里子

グードル氏の手套

●ラジオ「グードル氏の手套」

年月未詳

NHK

朗読Ⅱ若山弦蔵

オリーブ地帯

●映画名「第二の恋人」

一九五五(昭和三十)年七月

製作Ⅱ小倉武志

音楽Ⅱ万城目正

監督・脚色Ⅱ田島恒男

出演Ⅱ大木実 紙京子 草笛光子 菅原英一 沢

村貞子 斎藤達雄 吉川満子

あした来る人

●映画「あした来る人」

一九五五(昭和三十)年

日活映画

監督Ⅱ川島雄三

出演Ⅱ月丘夢路 三橋達也

春の雑木林

●映画名「霧子の運命」

一九六二(昭和三十)年五月

松竹映画

脚本Ⅱ木下恵介

音楽Ⅱ木下忠司

監督Ⅱ川頭義郎

配役Ⅱきり子・岡田茉莉子 継母・佐々木すみ江

善作・野々村潔 宇佐見・吉田輝雄 嘉十・

田村高広 その他・市原悦子 加藤嘉

魔の季節

●映画名「春のみづうみ」

松竹映画

一九五六（昭和三十一年）三月

脚色Ⅱ斎藤良輔

監督Ⅱ岩間鶴夫

製作Ⅱ小倉武志

出演Ⅱ淡島千景 山村聡 田村高広 杉田弘子 田

浦正巳 田村保 幾野道子 本橋和子

淀どの日記

●劇「淀どの日記」

一九六八（昭和四十三）年九月

「東宝歌舞伎九月特別公演」

劇場Ⅱ明治座

脚本Ⅱ榎本滋民

出演Ⅱ山田五十鈴 松本幸四郎

●ラジオ「淀どの日記」 「日曜名作座」・NHK

一九六二（昭和三十七）年一月七日～四月一日

脚本Ⅱ八木隆一郎

朗読Ⅱ森繁久弥 加藤道子

真田軍記

●劇「真田軍記」

一九六三（昭和三十八）年六月二日～二十六日

劇場Ⅱ明治座

劇団Ⅱ新國劇

三幕

脚色・演出Ⅱ川口松太郎 音楽Ⅱ星田一山

出演Ⅱ辰巳柳太郎 大山克巳 緒形拳 野村清一郎

河村憲一郎 郡司良 香川桂子

満ちて来る潮

●映画「満ちて来る潮」

一九五六（昭和三十一年）年

東映映画

脚本 〓 棚田吾郎

監督 〓 田中重雄

出演 〓 山村聰 高千穂ひづる 南原伸二 園ゆき子

み 山茶花究 上原謙 浦辺粂子

天平の甍

● 劇「天平の甍」

四幕十六場

一九六三（昭和三十八）年四月

劇場 〓 東京読売ホール

劇団 〓 前進座

装置 〓 伊藤憲明

脚色 〓 依田義賢

音楽 〓 団伊玖磨

演出 〓 宮川雅青 小沼一郎

出演 〓 河原崎長十郎 中村翫右衛門 河原崎国太郎

河原崎しづ江 戸田千代子 深町稜子 いま

むらいつみ 嵐芳三郎 瀬川菊之丞

● 映画「天平の甍」

配給・東宝

一九七九（昭和五十四）年

脚本 〓 依田義賢

音楽 〓 武満徹

監督 〓 熊井啓

配役 〓 鑑真・田村高廣 戒融・草野大悟 業行・井

川比佐志 普照・中村嘉律雄 栄叡・大門正

白い炎

● 映画「白い炎」

一九五八（昭和三十三年）

脚本 〓 柳井隆雄

監督 〓 番匠義彰

出演 〓 大木実 高千穂ひづる 田村高広 笠智衆

夏川静江 山鳩くるみ 有沢正子

水 壁

● 映画「水壁」

大映映画

一九五八（昭和三十三年）年

脚本 〓 新藤兼人

監督 〓 増村保造

出演 〓 菅原謙二 川崎敬三 山本富士子 野添ひと

明 その他・浜田光夫 高峰三枝子 高橋幸治

●ラジオ「天平の麓」 「私の文庫本」 毎日放送

一九七九（昭和五十四）年四月二十九日

●ラジオ「天平の麓」 NHK

一九六一（昭和三十六）年

NHKドラマ・イタリア賞参加

脚本Ⅱ矢代静一

朗読Ⅱ芥川比呂志 北村和夫 若山弦蔵 宮口精二

三谷昇 ナレーター・荒木道子

揺れる耳飾り

●映画名「慕情の人」

一九六一（昭和三十六）年二月

監督Ⅱ丸山誠治

出演Ⅱ原節子 三橋達也

東宝映画

年月未詳

リアルサウンドによる名詩集ステレオ・シリーズ

製作Ⅱコロムビアレコード

製作Ⅱ佐々木高之

企画・構成Ⅱ長谷川竜生 深代康介

●音楽「野分」「海辺」「木乃伊」

一九八三（昭和五十八）年

作曲Ⅱ高田三郎 男性合唱組曲集 音楽之友社

音楽Ⅱ組曲 詩「残照」

●音楽「高田三郎そのころの源をたずねて」・「東

敦子 新曲初演」・「コロロ・ファンタジアはじめ

ての定期演奏会」

一九九五（平成六）年十二月十二日

劇場Ⅱはまぎんホールヴィアマール

作曲・指揮Ⅱ高田三郎 「夕映え」「風」「比良の

シャクナゲ」「モンゴル人」「残照」

オルガン・竹前光子 ピアノ・高田江里

ソプラノ・東敦子

北国

●音楽「井上靖詩集『北国』より」

合唱・コロ・ファンタジア

ある落日

●映画「ある落日」

一九五九（昭和三十四）年四月

脚本Ⅱ大庭秀雄 光畑碩郎

監督Ⅱ大庭秀雄

音楽Ⅱ池田正義

出演Ⅱ岡田茉莉子 森雅之 高橋貞二 朝丘雪路

伊藤雄之助 奈良真養 渡辺文雄

楼 蘭

●舞踊劇「楼蘭」

一九六二（昭和三十七）年五月一日

「花柳わかば第1回リサイタル」

敦 煌

●TV「敦煌」

一九六〇（昭和三十五）年五月

NHK

NHKテレビ・ドラマイタリア賞参加

脚本Ⅱ菊田一夫

演出Ⅱ永山 弘

出演Ⅱ仲谷昇 北村和夫 杉浦直樹 八千草薫

神山繁 故里明美 三津田健

●劇「敦煌」

一九六〇（昭和三十五）年十月三十日～十一月二十

五日

「東宝ランド・ロマンス第十五回芸術祭主催公演」

劇場Ⅱ東京宝塚劇場

製作Ⅱ菊田一夫 堀内栄一 池野満

脚本演出Ⅱ菊田一夫 音楽Ⅱ古関裕而

舞台監督Ⅱ永野誠

出演Ⅱ八千草薫 高島忠夫（池部良） 市川段四郎

市川中車 中島そのみ 中村萬之助

●映画「敦煌」

一九八八（昭和六十三）年六月

脚本Ⅱ佐藤純彌 吉田剛

配給・東宝

監督 佐藤純彌

製作総指揮 徳間康快

出演 西田敏行 佐藤浩市 中川安奈 新藤栄作

原田大二郎 三田佳子 柄本明 綿引勝彦

蜷川幸雄 鈴木瑞穂 田村高廣 渡瀬恒彦

洪水

● 舞踊「洪水」

一九六二（昭和三十七）年四月五日〜一カ月間

第四十回「春の東おどり」長唄連とオーケストラ

劇場 新橋演舞場

作舞 尾上菊之丞

作曲 杵屋六左衛門

美術 伊藤薫朔

演出 戌井一郎

出演 まり千代 小寿賀 いそ子 五郎丸 その他

・新橋芸妓連

● ラジオ「洪水」

NHK第二

一九六〇（昭和三十五）年六月十四日

「現代日本文学特集第二夜」

脚色 須藤出穂

配役 女・加藤治子 張・三津田健 索勒・北村和

夫 語り手・名古屋章

河口

● 映画「河口」

松竹映画

一九六一（昭和三十六）年七月

脚色 檀藤利英

監督 中村登

音楽 黛敏郎

出演 岡田茉莉子 山村聰 田村高広 東野英治郎

杉浦直樹 滝沢修 町田祥子 沢村貞子

蒼き狼

● 劇「蒼き狼」

一九六三年（昭和三十八）年九月五日〜二十九日

「東宝現代劇特別公演」 三部二十六場

劇場 読売ホール

美術 伊藤慈朔

脚本・演出 菊田一夫

音楽 古関裕而

出演 市川染五郎 加茂さくら 八千草薫 中村萬

之助 林与一 南利明 北原真紀 文野朋子

●劇「蒼き狼」

一九八一（昭和五十六）年七月二日～十七日

劇場Ⅱ渋谷東横劇場

脚本・演出Ⅱ藤田敏雄

三味線Ⅱ鶴澤清治

浄瑠璃Ⅱ豊竹呂大夫

音楽Ⅱ林光

出演Ⅱ若山富三郎 三林京子 清水紘治 林ゆたか

石田太郎 辻萬長 高岡健二 桐山浩一 紀

比呂子 内田朝雄

●TV「蒼き狼」

テレビ朝日

一九八〇（昭和五十五）年十月六日・七日

脚本Ⅱ大野靖子

監督Ⅱ森崎東・原田隆司

配役Ⅱテムジン・加藤剛 ボルテ・倍賞美津子 カ

サル・河原崎次郎 ジュチ・荒木しげる ポ

オルチュ・田中邦衛 その他・平幹二朗 大

楠道代 大友柳太郎 ナレーター・仲代達矢

●劇「蒼き狼」

三幕

一九八三（昭和五十八）年十月一日～二十七日

「サントリースペシャル劇場」

昭和五十八年度文化庁芸術祭参加作品

劇場Ⅱ新橋演舞場

企画Ⅱ岡副鐵雄

脚色・演出Ⅱ榎本滋民

音楽Ⅱ山本直純

舞台監督Ⅱ斎藤雅文 広田進

出演Ⅱ北大路欣也 坂東玉三郎 芦田伸介 岡田嘉

子 金田龍之介 東千代之介 香川桂子 高

畑淳子 中村橋之助

●オペラ「蒼き狼」

四幕十四場

一九七二（昭和四十七）年十月十五日・十六日

昭和四十七年度文化庁芸術祭主催公演

二期会オペラ公演 創作オペラ

劇場Ⅱ東京文化会館

演出Ⅱ栗山昌良

脚色・作曲Ⅱ高田三郎 装置Ⅱ妹尾河童

指揮Ⅱ山田一雄 東京フィルハーモニー交響楽団

舞踊Ⅱユニーク・バレエ・シアター

配役Ⅱテムジン・栗林義信 クラン・松本美和子

ホエルン・桐生郁子 ボルテ・春日成子 捕

われの女・林ひろみ ベクテル・ジュベ・下

野昇 チンベ・河瀬柳史 僧・長春真人・高

橋修一 トオリルカン・小田清 ソルカンシ

ラ・高橋大海 ナレーター・平野忠彦

●アニメーションドラマ「蒼き狼」 よみうりテレビ

・東京ムービー

一九七二（昭和四十六）年三月 五十二回放送

●ラジオ「蒼き狼」 「日曜名作座」・NHK

一九六七（昭和四十二）年六月四日～七月三十日

脚本Ⅱ霜川遠志

朗読Ⅱ森繁久弥 加藤道子

渦

●映画「渦」

一九六一（昭和三十六）年

監督Ⅱ番匠義彰

出演Ⅱ岡田茉莉子 佐田啓二

しろばんば

●映画「しろばんば」

一九六二（昭和三十七）年

監督Ⅱ滝沢英輔

出演Ⅱ北林谷栄 島村徹

●TV「しろばんば」

一九七三（昭和四十八）年十一月五日～二十一日

「少年ドラマシリーズ」 九回

製作Ⅱ柴田和夫・久保田弘

脚本Ⅱ田中澄江

音楽Ⅱ川井学

憂愁平野

●映画「憂愁平野」

東宝創立三十周年記念映画

一九六三（昭和三十八）年

監督Ⅱ豊田四郎

製作Ⅱ佐藤一郎 金原文雄

脚本Ⅱ八住利雄

音楽Ⅱ團伊玖磨

出演Ⅱ森繁久彌 山本富士子 新珠三千代 浪花千

栄子 乙羽信子 仲代達矢 長門裕之 大空真弓

日活映画

東宝映画

補陀落渡海記

●ラジオ「補陀落渡海記」ラジオ名作劇場 NHK

一九八五（昭和六十）年十二月（再放送）

朗読Ⅱ森繁久弥 加藤道子

盛装

●劇名「菱の花咲く」

三幕

松竹現代劇

一九八一（昭和五十六）年五月

劇場Ⅱ名鉄ホール

脚本Ⅱ田井洋子

監督Ⅱ遠藤宣彦 宮永雄平

配役Ⅱ伏木麻子・中野良子 伏木小平太・芦田伸介

四糸庚一郎・山本學 咲子・馬淵晴子 早見

一彦・小島秀哉

城 砦

●ラジオ「城砦」

「日曜名作座」・NHK

一九六五（昭和四十）年七月十一日〜数回

脚本Ⅱ向田邦子

朗読Ⅱ森繁久弥 加藤道子

遠い海

●ラジオ「遠い海」

NHK

●ラジオ放送名「火の山」

NHK

一九六二（昭和三十七）年

NHK放送劇イタリア賞参加作品 ラジオ、テレビ

国際賞のグランプリを受賞

脚本Ⅱすどういずほ

音楽Ⅱ林光

出演Ⅱ小山田宗徳 若宮忠三郎 香川京子

楊貴妃伝

●劇「楊貴妃伝」

四幕十一場

一九八一（昭和五十六）年三月五日〜二十七日

「岡田茉莉子三越劇場三月特別公演」

劇場Ⅱ日本橋三越劇場

脚色Ⅱ八木柊一郎

音楽Ⅱ林光

演出Ⅱ戌井市郎

配役Ⅱ楊貴妃・岡田茉莉子 玄宗・渥美國泰 高力

土・小林勝也 安禄山・嵯峨善兵 皇甫惟明

・宗方勝巳 葉春・新橋耐子 梅妃・奈美悦

子

●劇名「玄宗と楊貴妃」 三幕

一九八七（昭和六十二）年九月四日～十月二十七日

昭和六十二年度文化庁芸術祭参加

劇場Ⅱ新橋演舞場

芸術監督Ⅱ藤間勘十郎

脚本Ⅱ三原邦男 斎藤雅文

演出Ⅱ中川寿夫 村田元史

出演Ⅱ片岡孝夫 坂東玉三郎 山本圭 近藤洋介

立川三貴 湯浅美 島田正吾 天本英世

光本幸子 南美江

羅刹女国

●舞踊劇「羅刹女国」

六景

年月未詳

脚本Ⅱ矢代靜一

化石

●映画「化石」

一九七四（昭和四十九）年

カンヌ映画祭で上映

脚本Ⅱ稲垣俊 よしたたけし 音楽Ⅱ武満徹

監督Ⅱ小林正樹 製作Ⅱ佐藤正之 岸本吟一

出演Ⅱ佐分利信 岸恵子 栗原小巻 小川真由美

井川比佐志 山本圭 佐藤オリエ 神山繁

滝田裕介 中谷一郎 宇野重吉 宮口精二

杉村春子 加藤剛（ナレーター）

●TV「化石」

一九七三（昭和四十八）年

映画上映の一年前にTV映画「化石を」製作・放映

監督 小林正樹

おろしや國酔夢譚

●映画「おろしや國酔夢譚」

配給・東宝

一九九二(平成四)年夏

脚本 野上龍雄 神波史男

佐藤純彌

監督 佐藤純彌

総指揮 徳間康快

配役 大黒屋光太夫・緒形拳 庄蔵・西田敏行 小

市・川谷拓三 九右衛門・三谷昇 磯吉・米

山望文 新蔵・沖田浩之 マリナ・ウラディ

その他 ヨーロッパ、ソ連から名優が多数参加

●ラジオ「おろしや國酔夢譚」

NHK・FM 大阪

年未詳五月十一日〜二十二日 月〜金 夜九時

「アドベンチャーロード」シリーズ

脚本 岸宏子 チーフプロデューサー 山本壮太

配役 光太夫・北大路欣也

●ラジオ「夜の声」

「日曜名作座」・NHK

一九六九(昭和四十四)年四月六日〜五月二十五日

脚本 高橋昇之助

朗読 森繁久彌 加藤道子

西域物語

●ラジオ「西域物語」

「私の文庫本」・毎日放送

一九八二(昭和五十七)年三月二十八日

月の光

●ラジオ「月の光」

「日曜名作座」・NHK

一九九二(平成四)年四月二十六日〜 四回

脚色 板谷全子

朗読 森繁久彌 加藤道子

樺の木

●ラジオ「樺の木」

「第一文芸劇場」・NHK

一九七二(昭和四十七)年四月八日

脚色Ⅱ伊馬春部

製作Ⅱ久保博 小林猛

演出Ⅱ香西久

●ラジオ「櫂の木」

「ラジオ名作劇場」・NHK

一九八四（昭和五十九）年五月十三日

出演Ⅱ森繁久弥 加藤道子

四角な船

●TV「四角な船」

NHK

一九七九（昭和五十四）年三月三日

「土曜ドラマ・サスペンスロマンシリーズ」

脚本Ⅱ柴英三郎

音楽Ⅱ樋口康雄

演出Ⅱ布施実

配役Ⅱ丸子東平・竹脇無我 上原大作・神山繁 勘

左衛門・花沢徳衛 豊の若・みなみらんぼう

●ラジオ「四角な船」

「日曜名作座」・NHK

一九七三（昭和四十八）年一月七日～二月二十五日

脚本Ⅱ石山透

朗読Ⅱ森繁久弥 加藤道子

星と祭

●ラジオ「星と祭」

「日曜名作座」・NHK

一九七六（昭和五十四）年四月八日 八回

脚色Ⅱ須藤出穂

朗読Ⅱ森繁久弥 加藤道子

親鸞

●頌讃曲「親鸞」

「親鸞聖人御誕生八〇〇年立

教開宗七五〇年記念演奏会」（このために作詞）

一九七三（昭和四十八）年四月十四日

劇場Ⅱ京都会館第一ホール

作曲Ⅱ松下真一

主催Ⅱ真宗教団連合等

指揮Ⅱ若杉 弘

出演Ⅱ滝沢三重子 莊智世恵 宮原卓也 栗林義信

語り手Ⅱ原田茂生

花壇

●ラジオ「花壇」

「日曜名作座」・NHK

一九八二（昭和五十七）年四月十八日

脚本Ⅱ山本淳子

音楽Ⅱ古関裕而

朗読Ⅱ森繁久彌 加藤道子

本覚坊遺文

●映画「本覚坊遺文」千利休

配給・東宝

一九八九（平成元）年十月七日

脚本Ⅱ依田義賢 製作Ⅱ西武セソングループ 西友

監督Ⅱ熊井啓

音楽Ⅱ松村禎三

配役Ⅱ本覚坊・奥田瑛二 千利休・三船敏郎 太閤

秀吉・芦田伸介 古田織部・加藤剛 織田有

楽斎・萬屋錦之介 東陽坊・内藤武敏 山上

宗二・上條恒彦 千宗旦・川野太郎

受賞Ⅱベネチア国際映画祭サンマルコ銀獅子賞・シ

カゴ映画祭賞・その他受賞多数の作品

●ラジオ「本覚坊遺文」 「FMシアター」・NHK

一九八八（昭和六十三）年一月九日

演出Ⅱ伊藤豊英

脚色Ⅱ高木達

音楽Ⅱ近藤譲

配役Ⅱ本覚坊・垂水悟郎 利休・西村昇 秀吉・米

倉 齊加年 東陽坊・中村伸郎 織田有楽・森

塚敏 古田織部・加藤武 山上宗二・橋爪功

岡野江雪斎・稲垣昭三

* 作品配列は原作の発表順。

* 以下未調べのため詳細の分からないもの。

「白い風赤い雲」Ⅱ「ぼくの母さん」でNTVから、

「額田女王」Ⅱテレビ朝日系から、ドラマ化された。

「断崖に立つ女」Ⅱ（昭和三十五年二月封切、松竹、

岩間鶴男監督、出演Ⅱ大木実 小山明子）。「春の

海図」「潮の光」も映画化されているらしい。

*ラジオ、テレビ等については分かったものをとりあ

えず映画・演劇表に書き加えました。

（表製作者・黒田佳子）

平成八年

私の備忘録より

浦城　いくよ

平成八年に私が参加しました井上靖関連の主な行事について、報告します。

も関わらず、お元気でうれしそうな先生の笑顔が印象的で、最後まで賑やかなあたたかい会でした。

一月十九日 第三回の井上靖文化賞は、作家の陳舜臣氏が受賞され、山の上ホテルにて贈賞式と祝賀会が開かれ出席しました。陳ご夫妻を始め、お子さま、お孫さま親類の方々も出席されました。退院後間もないに

一月二十八日 父の命日の前日で例年の通りにぎやかなお墓参りをしました。まれに見るような晴天で、お墓から見た天城の連峰が冷たい空気の中で美しく見えました。午後、湯ヶ島町主催の読書感想文コンクール

の授賞式が開かれ、その後財団誌「伝書鳩」について妹佳子が初講演をしました。

二月十日 午前中、米子井上靖友の会の理事会に出席。

午後は友の会の講演会が開かれました。講師は、聖心女子大学教授の鈴木秀子氏。題は「『わが母の記』に思う」。

この日は朝から大雪でした。その中を百名近くの聴講者が集まりました。老いの問題が現在のように関心を集めていない頃に問題提起している作品であること、最後まで残る自尊心にどう対処すべきか、人間の終末についてなど、長い年月の修業を積まれたシスターならではのお話でした。

二月十一日 市立米子図書館のコーナーで財団の後援により井上靖展が開かれました。このため、一昨年の暮以来打ち合わせをしてきました。地方新聞などでさいさい取り上げていただきました。家族が疎開してい

た鳥取県日南町の家は、築後三百年の古いわら屋根のくずれかけた家でした。その家に私たちの後に住んだという方が来られたということを聞き驚きました。家と周囲の風景をちぎり絵にして、長年ご自分の家に入額に入れて飾っておられたものを寄付されたのが印象的でした。

三月六日 世田谷文学館主催の「世田谷地域文学散歩」に参加された四十名の方が、世田谷の井上家に歩いてこられました。書斎、応接間、庭の母の畑などをご覧になり、父の生前の様子や旅のことなどを質問されるままに母と私でお答えしました。

三月十二日 井上靖記念室のある滋賀県高月町立図書館の、明定義人館長が来宅されました。前年の写真展「井上靖の撮ったアフガニスタン1973」に続いて本年は写真展「井上靖の撮ったイラン1973」を開くため、写真やフィルムを探したり選んだりしました。

保存状態の悪いものもあり困ったものです。

四月一日 旭川井上靖記念館の相談役会がクラブ関東で開かれ、出席しました。

四月三日 沼津の文学館を久しぶりに訪問しました。

桜の花が七分咲きで、交通の便さえよければ最高の環境です。野田和彦館長、友の会の傳田朴也会長、澤田角江さんにお会いし、館の運営などについてお話を伺いました。

四月十日 海外における日本文化の研究者または研究団体に対する表彰として、第一回の井上靖文化交流賞が林林先生に贈られました。「漢俳」という定型詩を創案され、日中の定型詩人の交流に大きな役割を果たされた詩人で、日本文学の研究者でもある方です。ホテル・ニューオータニで開かれた、贈賞式と祝賀会に出席しました。

五月十九日、二十一日 かえる会の上高地行きに参加しました。父が穂高のお月見に誘われて行った帰りに聞いたナイロンザイル事件の話が、小説「氷壁」のモチーフになりました。この穂高行が毎年行われるようになり、だんだん人数も増え、かえる会と名付けられました。ある春の山行きの折り、カエルが一面愛のシリーズを迎えているのを見て付けられた名前と聞いています。本年のかえる会は「奥様を徳沢園までおつれする」ということで原宿からバスで上高地に着き、高齢者を除いて一時間あまりを歩いて、「徳沢園氷壁の宿」に泊りました。途中野性のニホンザルの群がすぐ近くでエサを食べているのに出会ったり、遠くにニホンカモシカも見ました。バードウォッチングをしながらの楽しいウォーキングで、もちろんカエルは愛のシリーズでした。参加者十八名。井上家からは母、修一夫婦、佳子と私の五名が参加しました。雪を被った穂高連峰が素晴らしい眺めでした。大学生のころ、瓜生卓造氏や長越茂雄氏らに連れられて父と一緒に登った

奥穂高や前穂高行きのことなどを久しぶりに思い出しました。あの時のメンバーは殆ど故人になってしまわれました。

翌朝は「氷壁」のモデルで十九歳の青年の雪に埋もれたお墓を探してお参りました。前穂高の遭難現場が見える奥又白の登山道の脇にあるお墓でした。

五月二十五日 奈良の唐招提寺御廟聖域で安藤更生氏と井上靖の碑の除幕式が開かれ、母、佳子、私が出席。この日は二人の位牌を納める法要も、鑑真大和上のお像が納められている御影堂で行われました。奇しくも五月六日は鑑真の命日であり、父の誕生日です。

六月四日 各地の井上靖の関連館の方のサミット的な集まりを財団が中心になって開いてみては如何ですかという声が前からあり、やっと研修交流会を開いてみました。各館の代表的な方がたに、まず沼津の文学館に集まっていただき、文学館のお世話で小型バスに

乗って「夏草冬濤」の舞台になった妙覚寺、旧沼津中学、千本松原の碑、沼津駅前の碑などを見学して湯ヶ島の白壁荘に泊りました。読書会のことや展示やこれからの記念館のあり方など話し合いが行われました。

それぞれの館の成り立ちや経済基盤も違うので一緒に何かをするということはなかなか難しいことです。

翌日は役場のご好意で小型バスを出していただき、お墓参り、井上家跡地、小学校の碑、昭和の森、「しろばんば」の舞台などを見学しました。第一回の研修交流会は大変有意義なものであったと思います。お互い初対面の方も多く、本だけでは分からないものを見学して初めて理解ができてとてもよかったですとの声もありました。続けてみては如何かとの声もあります。同じ人ばかり集まって話し合うのもどんなものでしょうか。これからの課題です。

六月十六日 天城湯ヶ島町に天城会館がオープンしました。静岡県副知事、町長、木下順二氏と母が、テ-

ブカットをしました。式典に続いて陸上自衛隊音楽隊により「しろばんばの歌」も演奏されました。坂本由起子副知事さんをお誘いして、井上家跡地の「しろばんば」の碑や小学校の碑などをご案内しました。

その後県の文化関係を担当しておられる坂本副知事を沼津文学館友の会事務局の沢田さんと一緒に県庁にお訪ねしました。文学館もできてから年月が経ち、活動をさらに活発にするために読書会や展示会などもつと地域や場所を拡大してやりたいなどの希望をお話し、協力をお願いしました。副知事からは教育関係に働きかけてみましょう、館の方からも働きかけてくださいとのお話がありました。その結果、文学館のある長泉町立図書館の文芸講座の第一回に井上靖が取り上げられ、伝田先生が講師として何うことになりました。また、平成九年に行われる「伊豆文学フェスティバル」の中でも井上靖が取り上げられることになったと伺っています。

六月二十日 沼津井上文学館の読書会の方がたが井上家を訪問されました。もう二十年も続いている熱心な方がたです。お茶を飲みながら母と私のために自己紹介をしてくださり、また私どもはご質問にお答えしたりの楽しい時間を過ごしたあと、書斎や庭の書庫などをお見せし、馬事公苑をご案内しました。

七月八日 日本中国文化交流協会創立四十周年記念レセプションがホテル・ニューオータニで開かれました。母は入院中で欠席、修一、佳子と私が出席しました。

八月三十日、九月一日 旭川の井上靖記念館を訪問しました。平成七年六月に記念館の活動の一つとして市の広報で呼びかけ、小説「わが母の記」読書会が三回開かれましたが、終了後参加者の希望で毎土曜日に井上靖作品を読む会が記念館で続けられています。講師は高校の先生である秋岡康晴氏。館長のお招きで私が参加したこの日は「しろばんば」の最終回でした。先

生の語りの楽しさや、熱心なメンバーの私に対する質問で午後の時間はまたたく間に過ぎてしまいました。

父の生まれた旭川に記念館ができ、父の作品について書いたり話したりしてくださっている秋岡先生のような方がおられることは、娘としてとてもうれしいことです。現地に行つてこそお目にかかれ、お互いに親しみが生まれます。今回はナナカマドの会の松田忠雄会長にも久しぶりにお目にかかりました。

八月十三日 軽井沢高原文庫で「中軽井沢・沓掛文学展」が七月二十日から約三か月間開催されました。出品者三十名の一人として、軽井沢に関係した小説の原稿と書簡類を井上家から出品しました。

夏休みを中軽井沢の山荘に滞在しておりましたので主人と見にまいりました。企画をされた大藤敏行副館長にも再会いたしました。

九月二十二、二十三日 疎開の地鳥取県日南町に総合

文化センターが春に設立され、その中に軽井沢にある山荘の父の書斎が再現されました。開館の式典には母と妹が出席しましたが、私は伺えませんでした。秋の休日を利用して主人と一緒に出掛け、室内の展示の飾り付けをしました。町内の国民宿舎に泊って朝八時半から昼食も早々に夕刻五時過ぎまで一生懸命でした。近くにある「野分の館」との関連を考えながらの飾り付けは大変でしたが、今思うと楽しいものでした。まだ未完成ですので、また近く行く予定です。

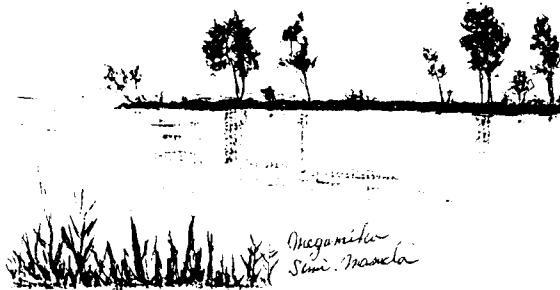
十月十九日 米子の友の会の講演会が開かれました。講師はかえる会のメンバーの高野昭氏。氏は野鳥の会の会員でもあり、父の小説の中で「海峽」が一番好きといわれ「井上靖と鳥と私——『海峽』を読む」と題されて鳥の話を変えての講演でした。

十一月九日 「天平の覺——鑑真大和上と唐招提寺展」が文化祭の行われている昭和女子大学の光葉博物館で

二十二日まで開催されました。国宝、重要文化財の他に和上ゆかりの品々と、井上家からの出品物として、「天平の薨」に関する資料と書斎にある品々を展示いたしました。小規模ながらとても感じのよい展示会でした。

十二月七日 平成九年の一月二十九日が父の七回忌に当たりますが、それに先だつてこの日に「偲ぶ会」が開かれ、生前お付き合いのあった二百六十名あまりの方がお集まり下さいました。場所は父が晩年楽しんで名前を付けた新高輪プリンスホテルの国際館バミールの「北辰」です。沼津中学、第四高等学校時代の友人や後輩たちが元気に柔道部の歌を父の写真の前で歌って下さり、本当にうれしく思いました。父の第一詩集『北国』を東京創元社のご好意により復刻いたし、みなさまにお持ち帰りいただきました。

(井上靖 長女)



奈良・唐招提寺に

安藤更生・井上靖の業績記念碑が建立

平成八年五月二十五日、奈良市唐招提寺境内にある鑑真和尚の墓地内に、このたび、遠藤證圓唐招提寺八十二世長老の提唱により、安藤更生・井上靖の業績を記念する碑が建立され、その除幕式がおこなわれた。

生前早稲田大学教授であつた安藤更生博士は、唐招提寺の開祖、鑑真和尚の研究を続け『鑑真大和尚傳の研究』を著した。この研究書を基に、中国から日本に仏教の戒律を伝えた和尚の困難の旅を、井上靖は小説『天平の甕』に書き上げた。

当時中国において忘れられていた鑑真の業績を中国全土に知らしめ、日本国内においても、一般に再認識させるきっかけとなった両著書と両著者を、記念するために建立された碑である。

当日、九十歳を迎えた安藤更生夫人きよ氏と、八十半ばを越えた井上ふみ財団理事長を中心に、親しい関係者二十人が式に参列。御影堂で法要が営まれた後、御廟聖域で、関係者全員の手で紅白の綱が引かれ、碑の除幕がおこなわれた。故人の思い出や、著作のいき

さつ等が語られるなど、心あたたまる除幕式となった。

記念碑

所在地 奈良市五条町 唐招提寺の境内北東 鑑

真の御廟前

碑石 生駒石（花崗岩） 高さ（一メートル）

幅（一・五メートル） 厚さ（五十センチ）

碑面 「天平の甍 井上靖」 『天平の甍』（中

央公論社）の表紙として使われた井上靖
の自筆を彫っている

右側 安藤更生・井上靖の生没年が西暦で刻

まれている

台座 前唐招提寺森本孝順長老の筆になる般若

心経经文と碑文の記されている巻物が碑

石の台座に埋められている

背後 碑の後ろの池縁に靖の好きだった「櫟」

の木、右横にナンテン萩、左横に更生が
愛したウルムチ産唐つばきが植樹された

碑陰

千載の昔淡海三船元開撰述の

『唐大和上東征傳』あり

早稲田大学教授安藤更生博士

『鑑真大和上傳之研究』を著す

作家井上靖その教示をえて

小説『天平の甍』を世に贈る

和上の行實巷間にひろまるは

両氏の功大なり

一九九六年五月吉日

唐招提寺 八十二世長老 證圓

安藤更生（一九〇〇—一九七〇）

井上靖（一九〇七—一九九二）

初期詩篇集 「春を呼ぶな」 余聞

金子 秀夫

すべての井上靖初期詩篇を一冊にまとめる企画をたて、作品収集、井上先生との打合せなどを処理したのは福田美鈴だ。おそらく彼女以外の人が先生に初期詩篇の出版相談をしたとしても、許諾されなかったらう。その理由は、小冊子、『旧「焰」同人座談会記録―井上靖先生を囲んで』（一九八七年七月、福田美鈴編集）を読み返してわかった。この座談会の詳細は紙数

の関係で、別の機会にゆずることにして、私が重視した要点のひとつは、要するに人間の信頼と愛情である。旧焰時代には、各自が自由に、福田正夫たちと共に歩んだ青春があったのだ。〈旧焰同人にならなかつたら、一生、詩を書いていなかったらう〉、〈自分の書いた『焰』時代の詩がね、いま、いいんじゃないかと思うんです。〉とも発言していることも、許諾の理

由はからんでいると私は思う。

ところで初期詩篇集のタイトルは、井上先生が「青春詩集」「初期作品集」「さくら散る」「梅ひらく」の仮題を示した。

が詩集装幀の日本画家福田達夫さんと美鈴は、それらの仮題はあまり適切でないと判断し、むしろ「出航」という、いかにも若々しく出発を意味する作品があったので、それを仮題に表紙絵を描いた。しかし井上先生は「出航」をグラから削除してしまった。

困った彼女が達夫さん宅へ相談に行つて、話し合つた結果、表紙絵は描きなおさず、また達夫さんが初期詩篇から「春を呼ぶな」を選んでタイトルにした。

そのことを編集・解説の瀬戸口宣司さんに報告してから、井上先生宅へ相談、打合せに伺つたとき、タイトルを決めたことを伝えると、「いい題だね」と、喜ばれた。

表題作「春を呼ぶな」は当初、旧『焰』六月号（昭和六年）に「詩二篇」として発表、昭和七年の『焰・

年刊詩集』には、「面をあげてゆく」と「春を呼ぶな」に分けて、それぞれ改題されている。

初期詩篇集収録作品は、宮崎健三作成「井上靖初期詩篇拾遺資料」に、美鈴が宮崎健三夫人から入手した「文学ABC」の作品コピー、故池永治雄に依頼して入手した「日本詩壇」の作品コピー、それから、近代文学館で調べた作品コピー、『井上靖全詩集』収載（拾遺詩篇）、第一詩集『北国』所収の初期詩篇等の七十篇あまりだった。

美鈴が井上先生宅へ初校ゲラを受け取りに行つたとき、収録作品七十余篇が三十一篇に削られ、彼女は落胆して帰宅したことがあった。作品には巻頭の「冬に来る日」その他に数カ所訂正が入つた以外、校正ミス程度のものだが先生の手が入つた。

その後、初期詩篇集は三十一篇では、詩集としての厚さが出せないと彼女は判断し、十篇を加えて四十一篇にした。

瀬戸口さんの解説は先生自身が一行つけ加えてほし

いと要求したほかは、気にいったようすだった。

刊行は予定より、かなり遅れて「焰」叢書第一巻として、平成元年（一九八九）十一月、福田正夫詩の会から発行された。

初期詩篇集に寄せる福田美鈴の愛情、情熱、実行力が、井上先生の心を動かし、青春時代の詩篇が一冊になったのだ。

井上先生は「あとがき」に「へこんど一篇一篇を、丁寧に読んだが、さすがに若さというものを、美しく、眩しく思った」と書いているが、そのとおり青春はまばゆかったと思う。

私は初期詩篇集を読むたびに、なによりもここには、若さ特有の感受した言葉が捉えたものがあり、屈折した青春のきらめきが生のひだにあつて、初々しく新鮮で魅力的だと思う。初期詩篇編集集中に、井上先生は詩を書く手ごたえを、「しつぽー」あたりのころに実感したと、私たちに語ったことがある。

萩原朔太郎詩集『水鳥』、室生犀星詩集『鶴』の詩

群は、文語脈のものだが、井上靖詩は、旧『焰』同人たちの大半と一緒に、福田正夫たちが推進した自由口語脈の流れの上で大きく花開いたものである。

これを書くために、あらためて「日本海詩人」「北冠」「焰」（戦前のもの）、『井上靖全集第一巻』所収、井上靖初期詩篇を熟読したが、戦前の時代においても、すぐれた詩的才能の発光、放射が感じられる。

井上靖文学の源流であることはむろんだが、自己確立期の井上文学の核がある。

時代や家族（父母）との進路変更などでの相克、柔道から詩文芸への方向転換、青春特有の自己確立への屈折したアナキーな情念などがみられる。論はともかく初期詩篇集『春を呼ぶな』成立の余談にとどめた。

（詩人・『焰』編集）

「三原山晴天」を読んで

黒田 佳子

いつだったか、父が何かの思ひ出話に、「享楽列車」の名前を口にしたことがあった。おかしな名前で頭に残っていたが、この『伝書鳩』の特集のために、父の演劇関係を調べていたら、突然この名前に出会って、ああ、これだ、と思った。

昭和八年の十一月、劇団・享楽列車が、井上靖の初期作品「三原山晴天」を上演している。

「三原山晴天」は「サンデー毎日」の懸賞小説に応募して、佳作となった作品で、昭和八年、父が二十六歳のときに書いたものだ。「享楽列車」という劇団は、大阪の角座という劇場でだけ公演していた劇団だったと聞いている。当時の劇評に「原作のほうがいい」と書かれてはいたが、その劇のパンフレットにあるあら筋と、「ナンセンス劇」と紹介されている文字とをみ

て、いったいなにを書いたのかと思っていた。

この一月、静岡県湯ヶ島町主催の「井上靖作品読書感想文コンクール」の発表日の講演会で、井上靖の初期の作品に触れた講演を聴いたあとで、講師の曾根博義氏に「三原山晴天」についてお聞きしてみると「あれはおもしろく出来ているですよ」とちよっとおかしそうな表情で答えられたのが印象に残って、それではと読んでみた。（講演内容は天城湯ヶ島町、平成十年一月刊行予定の『天城湯ヶ島町ふるさと叢書』に掲載されることと思います）

前から不思議に思っていたのは、父がどうして小説を書くなどということをはじめようになつたのか、何故一時芽が出始めたらしい小説家への道を平気で中断できたのか、ということだったが、「なにを考えていたのかねーあの頃はー」と父の返事はいつも要領をえなかつた。ただ、「初めての小説を書く前には、小説

など一冊も読んだこともなかつたよ」と言っていたのはよく覚えてる。読みもせず、どうして書けたのかとの問いには「でも、書けると思つたんだよ」との答え。一冊も読んだことがなかつたかどうかは別にして、「三原山晴天」でみるかぎり、当時の父は、文学の自覚を持つて作品を書いていたわけではなかつたのだろうという感想をもつた。父の表現どおり「賞金めあてに書いただけ」で、おもしろい学生アルバイトのようなものだったのではないだろうか。

しかしその頃には、既に書く才能があつて、書けば書いてしまい、投稿すれば入選し、劇化や映画化され、やがて原稿の依頼までがくるようになって、父は初めて戸惑つて考えた、というところであつたようだ。

小説を書くことを急にやめた理由は、「このままだと、小説家になるな、自分になりたかつたのは、詩人じゃなかつたかな、と思つたんだ」と説明してくれたことがあつたが、「三原山晴天」を読んでみて、そこらへんの父の気持ちが、すんなりと理解できたような

気がした。このあとの十年が父の作家としての土台であり、戦後の「獵銃」「闘牛」あたりの出発が、父にとっては本当にスタートだったのだ。

けれど、「三原山晴天」をクスクスと笑いながら読み終えてみると、そこには、娘として知っている父が見えると思った。楽天的であたたかく笑いの好きだった父の性格の一面だ。柔道学生あがりで、風来育ちのふざけ好きの学生だったにちがいないと思える青年井上靖が、どのように笑わせようかとこの短編を書いているそんな姿が、とてもリアルに浮かび上がってきた。

この「三原山晴天」を書いた当時、父がまだ結婚前の学生だったということを考えてみると、波長のずれている主人公の妻と夫の、けれど愛情あふれる題材など、よく書く気になったものだと、おかしくなってしまう。「君、体験しなくても小説は書けるよ、想像すればわかるのだから」と言っていた父の言葉が思い出されてくる。

そこで若かった父は、さぞかし面白い人であつたらうと、その三年後に結婚したはずの母に尋ねると「気難しく神経質で、ふざけることなんて……」とのこと。けれど、父は確かに気難しかったが、同時に、いつも話にはちよつとした面白味を加えるのが天性、といったところもあつた。それも冗談で笑わせるという感じではなく、なぜだか、笑ってしまふ、といったものが多かった。この笑いは多くの作品の中にも、ひよこつとでてくる父の特徴だと私はとらえている。八十歳で書いた小説「孔子」の語り手に「鶯鶯」（ひねしようが）なる名前をつけて、チラリと笑っていたときの父もそれだ。また、「三原山晴天」はペンネーム「沢木信乃」で発表されているが、晩年父が入院した時の病室の表札に「昔のペンネームだよ」とこの名前を使っていたが、誰かこの名前に気づくかなと、密かにおもしろがっていた父の表情を思い出す。

（井上靖 次女）

茶の湯と私

「本覚坊遺文」に思う

五十嵐 俊子

中学三年の時だったか、高校の時になってからだったか、学校の遠足で近郊の小さな山に登ったことがあった。遠足と言えば、当時の私は食べることしか頭になく、もう詰められる限りのお弁当とおやつをリュックに詰め、喜び勇んで出かけた。

目的地に着くと、ちよつと風変わりだが魅力的な友達が、やおらリュックの中から小さな小瓶を取り出し、近くの小川の水を入れ、そのへんの草花を、ポンと一

本投げ込んだ。それから、リュックの中から茶碗と抹茶の粉を出し、山小屋からもらってきたヤカンのお湯で、シャバシャバとお茶を点てでした。

私は天地がひっくり返るほど感動した。風でユラユラとゆれている野花と、不器用にセーラー服を着た友人と、そこだけをくつきりと切り取ったように、あたりのものはすべて消え、それだけが存在していた。なんとかつこいい！ この世の中には、こんなすばらし

いこともあるのだ。私の持ってきたおやつなんてもちろん、それまで抱いていた世俗的な夢も、なんとみすばらしい。世界が一変して見えた。

あれから五十年近く、お茶は私の生活そのものだった。いつの間にか私の周囲には一緒にお茶をしたいという人が何人か集まるようになった。その人たちから何かお茶のよい本はないでしょうかと聞かれることがよくある。彼女等の言うお茶の本とは、おおむねお茶の点前の手引書を指している。

しかし、私は本を読むのなら、岡倉天心の「茶の本」か、井上靖氏の「本覚坊遺文」を読みなさいと薦める。特に井上靖氏は、小説という形を取りながら、茶の湯の持つ本質的な面白味と同時に矛盾をも語っていると思うからだ。

本覚坊は川原の冷え枯れた道を歩いている夢をみる。少し先を利休が歩いていて本覚坊は師のお供をしている。その冷えた道の行く先は華やかな京の巷に通じ

ており、利休はついてきてはいけなさと無言で弟子に伝える。冷えかじけた風景に究極の美を見いだして行くこうとする茶の湯の道は、気がついた時は、権力と財力の波に吞まれてしまっている。本覚坊はこの時、茶の湯の矛盾を悟った。感じていたのは、もうずっと前からに違いない。百も承知しながら口には出さない師に従い、その後ろ姿を少し斜めから見ていた本覚坊は、ずっと感じ続けていたに違いない。そしてこの時、はつきりと悟ったのだ。決して師の後を追うまいと。

本覚坊は作中の人物であるが、實在の茶人、利休の孫の宗旦もこのことを少年の時に悟った。大徳寺の喝食であった少年宗旦は、駕籠に乗って堺に送られる祖父利休を、大徳寺の門前で見送っている。彼は決して祖父の後を追うまいと、仮病まで使って世に出ることを拒み、一生乞食宗旦として侘茶を貫き通している。

東陽坊・山上宗二・岡野江雪斎・古田織部・織田有楽、これらの人々が命をかけてまで茶の湯に没頭していったものは何なんだろう。もちろん当時にも茶の湯

が世俗的な社交であり、それなりの利益をもたらすものであった人々も多かったに違いない。しかし「本覚坊遺文」にはそれだけではない人びと、茶の湯の誠を得ようとする人びとが描かれる。茶の湯を通して死の側から見た生の輝き。利休の賜死事件をめぐる人びとを描きながら「本覚坊遺文」の全篇に流れるものは、冷えかけ、凍った寂びの世界であり無常感である。だからこそ、それが凍てついた世界であればこそ、そこに咲く名もない草、人びとのちいさな出会いが無限の輝きを放つ。

五十年前、中学生の私が見たのは、この小さな草花だったのだ。そしてそれは今も私の中で初夏の風に吹かれてゆらゆらとゆれ続けている。

（茶道指導者）

* * *

下北半島「海峡いさり火公園」周辺

昭和三十三年三月 井上靖は当時連載中の小説「海峡」のアカエリヒレアシギの渡りの録音をとる場面のため、青森県下北郡風間浦村に、取材旅行をしている。（この鳥がこの地点を渡るのは、実際は十月頃）

この旅の詳細を井上靖は「雪の下北半島紀行」（昭和三十三年七月 雑誌「旅」）に記している。当時案内をした越膳泰彦氏（現風間浦村企画財政課長）らの企画立案で、平成元年九月三十日「アカエリヒレアシギ」の碑が「海峡いさり火公園」に建立。同年六月と九月に井上靖は村を再訪。この時の印象が詩集『星闌干』所収の「雨期」に。公園内には江戸末期、渡米途中に立寄った新島襄の記念碑も建つ。作家の水上勉氏の小説『飢餓海峡』はこの村が舞台。井上靖宿泊の宿に水上氏も三回宿泊。三人をつなぐ京都と風間浦村の縁として、同志社の河野仁昭氏が村で講演している。

井上靖記念文化財団

平成八年度 事業報告

井上 修一

平成八年度の本財団の主な事業を報告いたします。

(一) 第四回井上靖文化賞発表ならびに贈賞

文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました贈賞対象を、数次にわたる選考で四氏に絞り込み、十一月二十一日に選考委員の先生がたによる最終選考が、山の上ホテルで行われました。その結果、「白土吾夫氏と日本中国文化交流協会」に贈賞が決まり、当日報道・出版関係各社に通知されました。また平成九年一

月二十一日には、百五十余名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。これまでの贈賞者は小澤征爾氏、ドナルド・キーン氏、陳舜臣氏といずれも個人でしたが、今回は個人と団体が受賞なさいました。本賞は「個人または団体を顕彰」する目的で設置されておりますので、今回の贈賞により本賞の意図がより充実に実現したことになります。

なお選考委員には亡くなられた司馬遼太郎先生、渡米なさった大江健三郎先生に代わって新しく辻邦生先

生が加わってくださるようになりました。したがって選考委員の先生方は大岡信、辻邦生、樋口隆康、平山郁夫の四氏です。

(二) 第一回井上靖文化交流賞の贈賞式

本賞の選考は昨年度に行われ、贈賞者には中国の詩人で日本文化研究者でもある中国日本友好協会の副会長の林林氏が決まっておりますが、林林氏の来日の日程の関係で、贈賞式ならびに祝賀パーティが本年度にずれ込み、四月十日(水)に日本中国文化交流協会と一ツ橋綜合財団のご協力によりホテル・ニューオータニで行われました。

(三) 平成八年六月四日から五日にかけて井上靖関係の文学館、記念館、記念室等の連携を緊密にするための「井上靖関連館研修交流会」を沼津と天城湯ヶ島町にて行い、都合六館より十名のご参加をいただきました。

(四) 平成八年六月五日に鳥取県日野郡日南町の「日南町総合文化センター」内に本財団の協力で「井上靖文学展示室」として、井上靖の軽井沢別荘の書齋が再現されました。

(五) 平成八年七月二十日から十月十三日まで、長野県軽井沢町塩沢の軽井沢高原文庫にて、同文庫主催の「中軽井沢・杳掛の文学展」が開催され、本財団も資料を出品しました。

(六) 平成八年十一月九日から二十二日まで、東京都世田谷区太子堂の昭和女子大学光葉博物館にて同大学主催、本財団協力の「天平の薨——鑑真大和上と唐招提寺展」が開催されました。

(七) 平成九年一月八日から二月二十八日まで、滋賀県伊香郡高月町の高月町立図書館内「井上靖記念室」にて本財団後援により写真展「井上靖の撮ったイラン

1973」が開催されました。

(八) 平成九年一月二十六日に静岡県田方郡天城湯ヶ島町「天城会館」にて天城湯ヶ島町主催の「追悼・井上靖」の行事が行われました。これに引き続いて、第五回「井上靖作品読書感想文コンクール」入選者表彰

と記念講演会がありました。

また当日の午前中には、天城湯ヶ島町ならびに静岡県駿東郡駿河平の井上文学館主催の七回忌の「翌檜忌」が、同町熊野山の井上靖の墓前にて行われました。

(九) 平成八年度の本財団理事・評議員は次の方がたです。(五十音順)

理事長 井上ふみ

常任理事 井上修一

理事 大岡信 相賀徹夫 上林吾郎 小西甚右衛

門 佐藤亮一 高碇芳郎 徳間康快 野間

佐和子 平山郁夫 横地治男

監事 三木啓史

評議員 井上卓也 浦城幾世 大越幸夫 大波加弘

尾崎秀樹 角川歴彦 嶋中鵬二 黒田佳子

高野昭 高原須美子 緑川亨

悼 嶋中鵬二氏 逝去

本財団の評議員として長らくご指導いただきました嶋中鵬二氏(中央公論社会長)が平成九年四月三日に逝去されました。

生前の多大なご尽力に対して心より感謝いたしますと共に深く哀悼の意を表します。

(井上靖記念文化財団 常任理事)

鳩のお知らせ

★平成八年五月二十五日 正午 奈良県唐招提寺境内において、安藤更生と井上靖の業績を顕彰する記念碑の除幕式が行われた。

★平成八年六月五日 鳥取県日南町に総合文化センターが開館された。同館内に「井上文学展示室」が設けられ、また、図書館には「井上靖コーナー」が設置されている。

★平成八年八月 井上靖の七回忌を迎えるにあたり、井上家は故人と関係の深かった「神奈川近代文学館」と「日本現代詩歌文学館」に、井上靖が所蔵していた蔵書多数を寄贈し、保管整理を依託した。

★平成八年十一月九日～二十二日 「天平の甕―鑑真

大和上と唐招提寺」展が昭和女子大学光葉博物館で開催された。和上の持つてきた当時のレースなど唐招提寺の国宝や重要文化財も出品された展覧会で、井上靖の「天平の甕」の文学碑が鑑真和上の御廟近くに建立されたことを記念して開催された。井上靖の身近な品々や「天平の甕」に関する資料も展示された。

★平成八年十二月 至文堂『国文学解釈と鑑賞』別冊に「井上靖 詩と物語の饗宴」のサブタイトルで曾根博義氏が編集、四十二人に及ぶ執筆者によって、井上靖の特集が組まれている。

★平成八年十二月 第四回井上靖文化賞の贈賞は白土吾夫氏と日本中国文化交流協会に決定した。

★平成九年一月 滋賀県高月町 高月町立図書館「井上靖記念室」にて、井上靖が自ら撮ったイラン旅行の写真展がひらかれた。

★平成九年一月二十九日 井上靖の七回忌にあたり、これに先だって平成八年十二月七日、東京高輪ブ

リンスホテルで「偲ぶ会」が開かれた。

★平成九年一月二十六日 恒例の湯ヶ島町主催「井上靖作品読書感想文コンクール」の入選発表会が開かれ、日本大学教授、曾根博義氏による井上靖の作品の特質とその初期作品に触れた講演が行われた。内容の詳細は湯ヶ島町がこの行事にちなみ毎年刊行している叢書「井上靖とわが町」（平成十年一月発行）に掲載される。

★平成九年七月六日 午後二時から 岩手県北上市の「日本現代詩歌文学館」では、井上靖記念文化財団の、第一回井上靖文化交流賞受賞者、中国詩人の林林氏を招き、俳人の金子兜太氏と歌人の篠弘氏とともに、中国詩歌の世界を展望する企画をたてている。林林氏は短歌、俳句をとりいれた「漢歌」「漢俳」を創始し中国に広めた。

★また日本現代詩歌文学館では今、「井上靖晩年の詩業」（仮題）の出版のための編集が進められてお

り、近く刊行の予定になっている。

「井上靖展」―開催

平成九年九月二十七日～十一月三日

京都市の思文閣美術館（左京区田中関田町二の七）で、井上靖が在住した京都を中心に、「青春放浪時代」から「新聞記者時代」、さらに文壇デビューへとつながる時代をテーマにとりあげた文学展の開催が企画されている。

★新潮社から『井上靖全集』（全二十八巻 別巻一）が刊行され、現在二十三巻まで発売中。二十三巻は自伝エッセイを収録している。

井上靖に関する

文学館・記念館

住所又宅

駿河平 井上文学館

所在地 静岡県駿東郡長泉町駿河平

電話 〇五五九 八六一一七七

湯ヶ島町 伊豆近代文学博物館 特別展示コーナー常設

(昭和の森会館内)

所在地 静岡県田方郡天城湯ヶ島町湯ヶ島

九九二二二八

電話 〇五五八 八五一一一〇

湯ヶ島町 湯ヶ島小学校内 記念室

所在地 静岡県田方郡天城湯ヶ島町湯ヶ島

旭川市 井上靖記念館

所在地 北海道旭川市四区一条一丁目

電話 〇一六六 五二一一七四〇

米子市 アジア博物館・井上靖記念館

所在地 鳥取県米子市大篠津町五七番地

電話 〇八五九 二五一一二五一

日南町 野分の館

所在地 鳥取県日野郡日南町神福

電話 〇八五九 八二一一一一

日南町 日南町総合文化センター 井上文学展示室

所在地 鳥取県日野郡日南町霞七八五

電話 〇八五九 七七一一一一

高月町 高月町立図書館 井上靖記念室

所在地 滋賀県伊香郡高月町渡岸寺一一五

電話 〇七四九 八五一四六〇〇

金沢市 石川近代文学館 記念室

所在地 石川県金沢市広坂中央公園内

電話 〇七六二 六一一一六〇九

内灘町 内灘町立図書館 井上靖文庫

所在地 石川県河北郡内灘町大清水

電話 〇七六二 八六一一九三〇

大阪府 大阪井上靖文庫 (個人文庫 日曜のみ開館)

所在地 大阪府和泉市青葉台一八の三

電話 〇七二五 五六一六七六三

旭川市 旭川北鎮記念館

所在地 北海道旭川市春光町陸上自衛隊旭川第二師団

電話 〇一六六 五一六一一一

奈良市 ならシルク・ロード博物館 奈良公園館

所在地 奈良市雑司町四六九

電話 〇七四二 二二一〇三七五

松本市 旧制高等学校記念館

所在地 長野県松本市県三一

電話 〇二六三 三五一六二二六

世田谷区 世田谷文学館

所在地 東京都世田谷区南烏山一〇一

電話 〇三 五三七四一九一一

北上市 日本現代詩歌文学館

所在地 岩手県北上市本石町二丁目五一六〇

電話 〇一九七 六五一七二八

東京駒場 日本近代文学館

所在地 東京都目黒区駒場四一三一五五

電話 〇三 三四六八一四一八一

神奈川県 神奈川近代文学館

所在地 神奈川県横浜市中区山手町一〇

電話 〇四五 六六二一六六六

北佐久郡 軽井沢高原文庫

所在地 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢二〇二一三

電話 〇二六七 四五一一一七五

世田谷区 光葉博物館 (昭和女子大学内)

所在地 東京都世田谷区太子堂一七

電話 〇三 三四一一一五〇九九

京都市 思文閣美術館

所在地 京都市左京区田中関田町二一七

電話 〇七五 七五一一七七七

編集後記

井上靖が死して、早くも六年が経ちました。

今年は、七回忌を迎えるにあたり、それにちなむ企画が多く、「伝書鳩」にいただく原稿も内容の豊富なものがたくさん寄せられ、楽しい仕事になりました。

四号にもなると、それなりに実績を認めていただき、全国から関連の印刷物やお知らせなどが送られてくるようになり、ニュースもさまざまに広く入り、編集するに当って、心づよい思いになってまいりました。

少し慣れたところで、井上靖の研究、資料集めなどに、さらに力を入れていく編集を、こころがけたいと思っております。

美しいカットを描いて下さった増田朱躬さん、また陰で、編集をお手伝い下さっているみなさま、ありがとうございます。

黒田 佳子

伝書鳩 第四号 一九九七年 五月 発行

編集者 黒田 佳子

発行 (財)井上靖記念文化財団
横浜市青葉区新石川 三十一八一九